中学校社会科副読本

京丹後市の歴史

目　次

第１章　京丹後市の地質と美しい自然景観 …… 1
1 日本列島の誕生 …… 1
2 丹後半島の地質 …… 1
3 山陰海岸国立公園 …… 2
4 丹後天橋立大江山国定公園 …… 2
5 山陰海岸ジオパーク …… 3
6 日本海の海流 …… 4

第２章　遺跡からみる丹後の姿 …… 5

第３章　京丹後市の縄文時代 …… 7
1 平遺跡 …… 7
2 浜詰遺跡 …… 7
3 その他の縄文遺跡 …… 8

第４章　京丹後市の弥生時代 …… 9
1 竹野遺跡と途中ヶ丘遺跡 …… 10
2 扇谷遺跡 …… 10
3 函石浜遺跡　中国の新の「貨泉」出土 …… 11
4 奈具岡遺跡 弥生時代中期の玉つくり遺跡 …… 11
5 日吉ケ丘遺跡 …… 12
6 左坂墳墓群 …… 12
7 三坂神社墳墓群 …… 13
8 大風呂南１号墓 …… 13
9 赤坂今井墳墓　弥生時代後期の丹後の王墓 …… 14

第５章　京丹後市の古墳時代 …… 15
1 大田南２号墳と画文帯環状乳神獣鏡 …… 15
2 大田南５号墳と青龍三年銘方格規矩四神鏡 …… 16
3 カジヤ古墳 …… 16
4 浅後谷南遺跡 …… 17
5 蛭子山古墳 …… 17
6 網野銚子山古墳 …… 18
7 神明山古墳 …… 19
8 黒部銚子山古墳 …… 20
9 産土山古墳 …… 20
10 ニゴレ古墳 …… 21
11 湯舟坂２号墳 …… 22
12 遠處遺跡 …… 22

第６章　古代の丹後 …… 23
1 古事記・日本書紀に記される古代丹後 …… 23
2 海部氏系図と海部直の伝承 …… 24
3 丹後国の誕生 …… 26
4 寺院の建築と俵野廃寺 …… 26
5 国分寺・国分尼寺の建築 …… 27
6 渤海使と横枕遺跡 …… 28
7 平安時代の仏像 …… 29

第７章　中世の丹後 …… 30
1 荘園などの地名 …… 30
2 本願寺本堂 …… 30
3 南北朝時代の合戦 …… 31
4 室町時代から戦国時代の丹後 …… 31
5 中世、戦国時代の山城 …… 32
6 供養塔とお墓 …… 32
7 中世における京丹後市の文化財 …… 33

第８章　近世の丹後 …… 34
1 細川藤孝・忠興の丹後支配 …… 34
2 細川ガラシャと味土野 …… 34
3 松井康之の久美浜支配 …… 35
4 京極氏の丹後支配 …… 36
5 京極氏と峰山藩 …… 36
6 天領と久美浜代官所 …… 37
7 丹後ちりめんと絹屋佐平治 …… 38
8 丹後の大飢きん …… 39
9 廻船業 …… 40
10 伊能忠敬の丹後の測量 …… 41
11 近世の文化財 …… 42

第９章　近現代の丹後 …… 43
1 明治維新の丹後 …… 43
2 自由民権運動と天橋義塾 …… 44
3 豪商稲葉家と十二代稲葉市郎右衛門 …… 45
4 丹後震災と震災復興 …… 46
5 第２次世界大戦 …… 47
6 昭和 38 年の豪雪 …… 50
7 町村の合併 …… 51

第１０章　京丹後市の伝説・伝承 …… 52
1 丹後国風土記 …… 52
2 河上摩須郎女と丹波道主王 …… 56
3 田道間守の伝承 …… 56
4 豊受大神と伊勢神宮 …… 57
5 間人皇后の伝承 …… 57
6 麻呂子親王の鬼退治と丹後七仏薬師 …… 58
7 小野小町と五十河の伝承 …… 60
8 静御前の伝承 …… 61

第１１章　近世・近現代の京丹後市の先人たち …… 62

第１２章　京丹後市の民俗芸能　～京丹後市の祭り～ …… 66

第１３章　京丹後市の産業について …… 68
1 丹後ちりめんの歴史 …… 68
2 丹後の漁業 …… 70
3 丹後杜氏 …… 71
4 丹後の機械・金属産業 …… 72
5 京丹後市の農業 …… 72
6 京丹後市の観光 …… 74

コラム

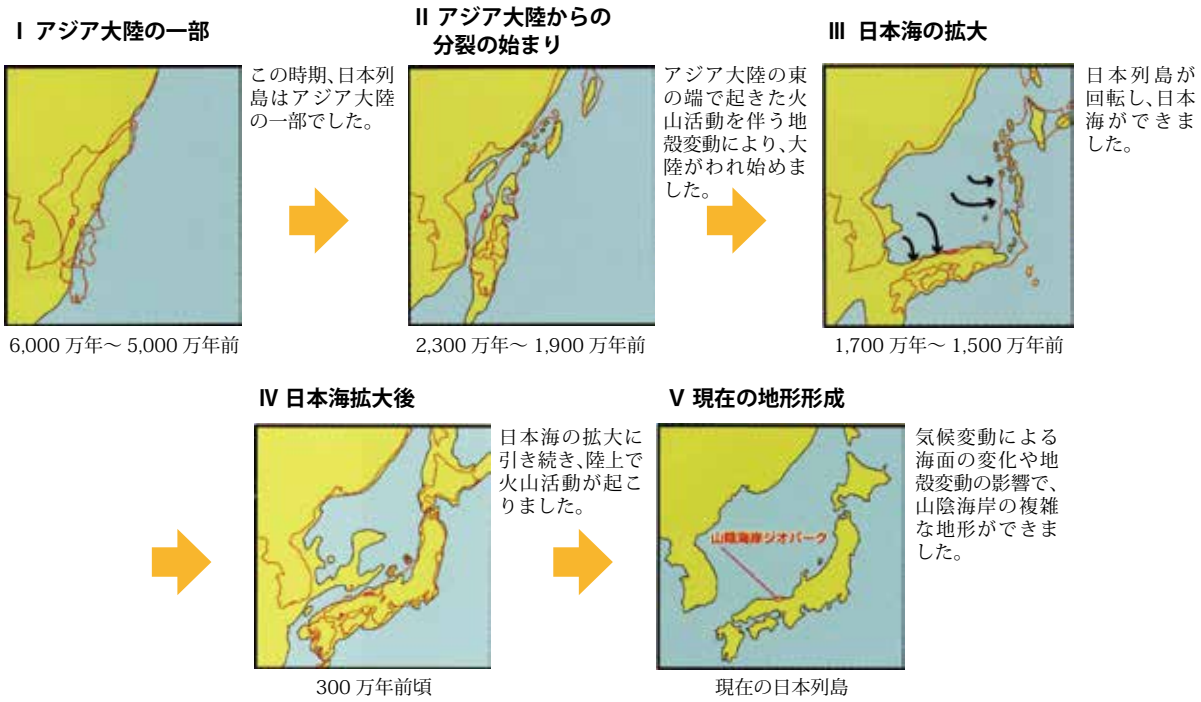
琴引浜 …… 3
縄文土器の模様 …… 8
陶塤（土笛）…… 11
潟湖 …… 19
王者の棺 …… 21
木簡 …… 28
新田開発 …… 37
廻船問屋の番頭さん …… 41
雪上船ソリ …… 50
竹野の鬼祭り …… 59
物価の移り替わり …… 75
京丹後市の木と花 …… 4
銅鐸 …… 10
年輪年代法 …… 18
丹後型円筒埴輪 …… 20
「丹後王国論」 …… 25
一遍上人と久美浜の龍神伝承 …… 31
文政一揆 …… 39
庶民生活の変化 …… 45
大路に伝わる羽衣天女の伝承 …… 55
経ヶ岬灯台 …… 73

第１章　京丹後市の地質と美しい自然景観

１ 日本列島の誕生

京丹後市は美しい自然に恵まれ、古代より日本海を通じて中国大陸、朝鮮半島と交流を持ち、進んだ文化を育んできた地域です。その歴史を育んだ日本海の誕生と地質についてみていきます。

日本列島は、約 2,000 万年前から火山活動やプレートの移動によりユーラシア大陸から離れ、その間には日本海が入り込み、約 1,500 万年前には現在に近い形になりました。そして、氷河期が終わる約 1 万年前、海水面が上昇したため、それまでつながっていた朝鮮半島や大陸と切り離され、現在の日本列島の姿になりました。



２ 丹後半島の地質

丹後には、日本列島ができる前後の時代の岩石や地層が、広く見られます。内陸部でよく見かける花崗岩（かこうがん）は、およそ 6,000 万年前のユーラシア大陸の地下で、マグマがゆっくり冷えて固まった岩石です。花崗岩は、海岸の白い砂の元になる石英・長石や砂鉄の原料の磁鉄鉱（じてつこう）などの鉱物からできていて、風化すると、崩れやすい「マサ土」になります。

スイス村などの山間部には、およそ 2,000 万年前のユーラシア大陸の縁（ふち）で起こった火山の噴火で流れ出た安山岩や玄武岩が見られます。海岸部には、1,500 万年前の日本列島ができた頃、火山噴火で流れ出た溶岩が固まった安山岩や流紋岩（りゅうもんがん）、同時に流れ出た火砕流（かさいりゅう）が堆積してできた凝灰岩（ぎょうかいがん）があります。安山岩でできた立岩と屏風岩がその良い例で、どちらにもマグマが冷え固まるときにできた規則的な割れ目（柱状節理（ちゅうじょうせつり））が見られます。

1,500 万年前にでき上がった日本海に堆積した地層は、泥岩・砂岩・礫岩として丹後の各地に残っています。たとえば、琴引浜には、海底に堆積した泥岩や砂岩があり、貝の化石や生物の生活の跡が残っています。また、琴引浜には緑っぽい色の凝灰岩も見られます。

3 山陰海岸国立公園

小天橋

京丹後市の誇るべきものの一つに、美しい自然景観があります。四季折々で、さまざまな表情を見せ、市民はもとより訪れる多くの旅人を魅了します。特に日本海が織りなす風景は絶品であり、春先の穏やかな風景、夏の青い空と海、夜の漁火、秋の赤・黄に色づいた山々と濃くなった海の青とのコントラスト、そして冬の荒れ狂う波など、それぞれの季節で全く異なった表情を楽しむことができます。

五色浜

山陰海岸国立公園は、京丹後市網野町浅茂川から鳥取県東部の鳥取砂丘までの日本海に面する 75km の海岸線を中心とする国立公園です。京丹後市では五色浜、夕日ヶ浦、久美浜湾などが見どころとなっています。久美浜湾は湾口に東から張り出した小天橋と呼ぶ 3km の砂州があり、外海と隔てられた内湾の地形は美しく雄大です。

4 丹後天橋立大江山国定公園

丹後天橋立大江山国定公園は、京丹後市から舞鶴市の由良川河口までの丹後半島海岸地区と丹後半島内陸部の世屋高原地区や大江山連峰地区をあわせた国定公園です。従来、海岸部のみが若狭湾国定公園として指定されていたものが、平成 19 年（2007）に内陸部も

内山ブナ林

丹後松島の朝日

味土野大滝

追加されて、丹後天橋立大江山国定公園となりました。

京丹後市では、琴引浜、城島、立岩、屏風岩、丹後松島、経ヶ岬、内山ブナ林、味土野大滝などが見どころとなっています。

久美浜湾

5 山陰海岸ジオパーク

「ジオパーク」とは、科学的に見て特別に重要で貴重な、あるいは美しい地質遺産や地形景観を複数ふくむ一種の自然公園のことです。

山陰海岸には、日本列島がユーラシア大陸の一部だった時代から、今日に至るまでの経過が確認できる貴重な地質遺産が数多く残されています。

山陰海岸ジオパークは、京都府、兵庫県、鳥取県の３府県、東西 110km、南北最大 30km の広い範囲に及んでいます。

京丹後市のジオサイトとしては、鳴き砂の琴引浜、経ヶ岬の海蝕崖、丹後松島、屏風岩、立岩、久美浜湾と小天橋といった海岸風景のほか、郷村断層や兜山、袖志の棚田などがあります。山陰海岸ジオパークは平成 22 年(2010)わが国で４番目となる世界ジオパークネットワークへの加盟が認定されました。

屏風岩

経ヶ岬の海蝕崖

立岩

コラム　琴引浜

琴引浜は、長さ約 1,800m の日本でも最大級で最良の鳴き砂の浜の一つです。

砂の上を歩いたり、棒などでつつくと、キュッ、キュッ、という美しい音がすることから、珍しい現象として古くから知られてきました。鳴き砂は、砂の中に多くふくまれる石英の砂粒がこすれあって振動することによって起こり、琴引浜には、石英が約 70 パーセント含まれています。また大きさが数ミリ以下の小さな微小貝や原始的な生物である有孔虫も生息しています。これらの生物は海が汚れると死んでしまうもので、きれいな海にのみ生息する生物です。このような生物が生きている海だからこそ鳴き砂も保たれているのです。

琴引浜

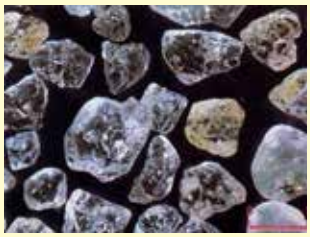
また、中央部には岩礁のある浜があり、こぶしでたたくとドンドンと鳴ることから、「太鼓浜」と呼ばれています。

琴引浜は、昔から白砂青松の景勝地として知られてきた砂浜で、丹後を支配した細川藤孝（幽斎）や細川ガラシャ、与謝野晶子なども和歌を残しています。

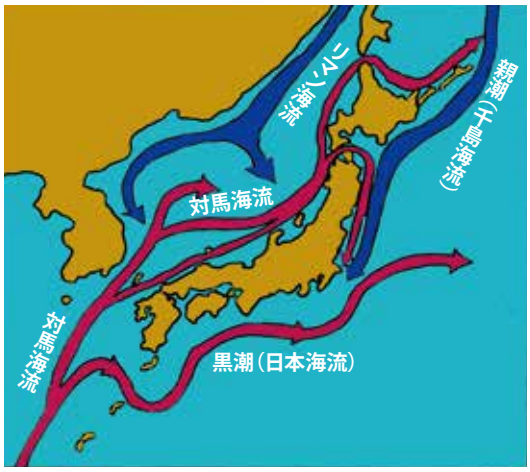
根上がりの　松に五色の　糸かけ津
　琴引き遊ぶ　三津の浦浜　　（細川幽斎）
名に高き　太鼓の浜に　鳴神の
　遠にも渡る　秋の夕さめ　　（細川ガラシャ）
おく丹後　おくの網野の　浦にして
　入日をおくる　旅人となる　　（与謝野晶子）

琴引浜は国の天然記念物及び名勝に指定されています。この美しい自然と鳴き砂を京丹後市の財産としてずっと伝えていきたいものです。

微小貝


琴引浜の石英

６ 日本海の海流



日本近海の海流

日本近海には大きく分けて４つの海流があります。フィリピンあたりから太平洋側へ流れる黒潮（日本海流）、沖縄あたりで黒潮から分れ日本海に流れる対馬海流、オホーツク海など北から太平洋側へ南下して流れてくる親潮（千島海流）、また北のロシアあたりで間宮海峡を南下してくるリマン海流の４つです。

丹後半島の沖合いには対馬海流が流れており、丹後の海岸にはヤシの実、外国の文字の書かれたライター、容器などいろいろな物が流れてきます。

コラム　京丹後市の木と花

京丹後市の木と花を知っていますか？

京丹後市の花はトウテイランで、山陰海岸の砂丘にみられ函石浜にも咲く花で８月から９月にかけて青紫色の花をつけます。

京丹後市の木であるブナは、温帯林を代表する落葉広葉樹で多様な生き物を育む環境のシンボルとされ、大宮町内山から宮津市上世屋にかけては、京都府内で最大のブナ林が広がっています。

合併前の町の花として、峰山町はさつき、大宮町は百日草、網野町と久美浜町がチューリップ、丹後町が水仙、弥栄町が福寿草となっていました。

トウテイラン

第２章　遺跡からみる丹後の姿

三坂神社墳墓群

縄文時代から古墳時代にかけての丹後の遺跡や考古資料についてみていきます。京丹後市で確認されている墳墓・古墳の数は約 4,500 基を数えます。京都府の墳墓・古墳の数が約 12,000 基ということからすると、京丹後市の墳墓・古墳の数が多いかがわかります。このことは、古代においていかに丹後が発展した地域であったかを物語っています。

そして、昭和 50 年代後半から国営農地開発や道路の建設、圃場整備などの工事に関連して多くの発掘調査が行われ、貴重な遺跡が数多く発見されました。弥生時代後期の方形台状墓からは、多量の鉄製品やおびただしい数のガラスの玉類が、出土しました。弥生時代における丹後からの鉄製品やガラス製品の出土量は、日本の中で、北部九州についで多く、特筆すべき大きな特徴です。また、奈具岡遺跡では水晶の玉つくりなども注目されました。

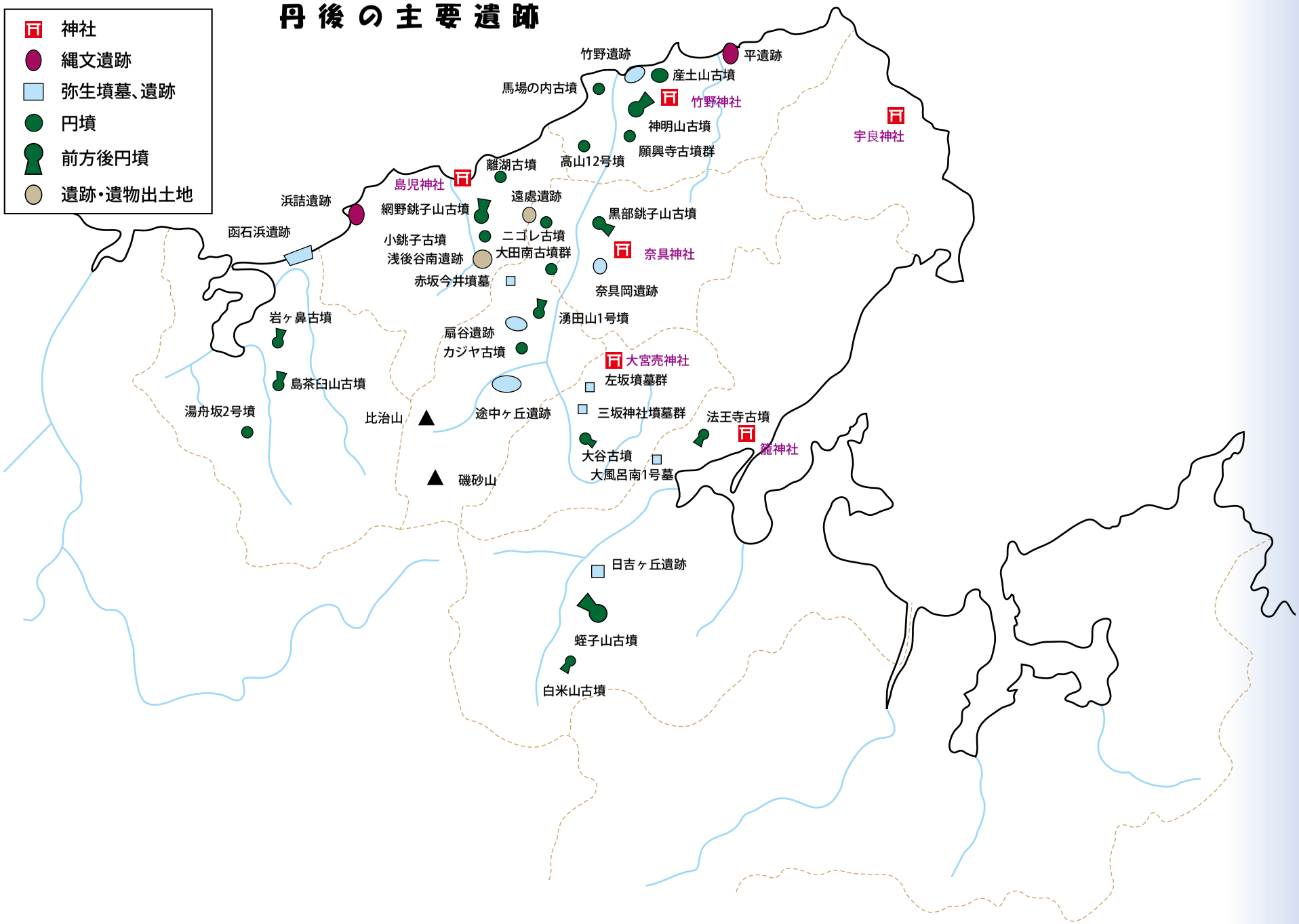
古墳時代の巨大な前方後円墳を頂点とする社会が、発掘調査を通じて、しだいに明らかになってきました。また遠處遺跡の古代製鉄遺跡の発見は、丹後の進んだ技術を教えてくれました。この章から第 5 章までは、発掘調査を通じて、明らかになってきた成果を見ていきたいと思います。最近の研究では、古代丹後は中国大陸、朝鮮半島との玄関口としての役割を持ち、交易を通じて、先端の技術を持った極めて進んだ社会だったことが明らかになってきました。

また、併せて文献に記された古代の丹後について考えながら、丹後に伝えられてきた伝説、伝承と比較し、見ていきたいと思います。これらの内容はまだ十分に解明されたものばかりではありませんが、丹後が歩んできた歴史を考えるヒントになることも多く含んでいると思います。

なお、与謝野町の日吉ケ丘遺跡、大風呂南 1 号墓および蛭子山古墳は、市内の遺跡ではありませんが、古代の丹後を考える上で、特に重要な遺跡ですので、第 4 章と第 5 章でそれぞれ紹介しています。

赤坂今井墳墓

丹後の主要遺跡


神社
縄文遺跡
弥生墳墓、遺跡
円墳
前方後円墳
遺跡・遺物出土地
竹野遺跡
平遺跡
産土山古墳
馬場の内古墳
竹野神社
神明山古墳
宇良神社
願興寺古墳群
高山12号墳
離湖古墳
島児神社
浜詰遺跡
遠處遺跡
網野銚子山古墳
黒部銚子山古墳
函石浜遺跡
小銚子古墳
ニゴレ古墳
浅後谷南遺跡
大田南古墳群
奈具神社
赤坂今井墳墓
奈具岡遺跡
岩ヶ鼻古墳
湧田山1号墳
扇谷遺跡
カジヤ古墳
大宮売神社
島茶臼山古墳
左坂墳墓群
湯舟坂2号墳
比治山
途中ヶ丘遺跡
三坂神社墳墓群
法王寺古墳
籠神社
大谷古墳
大風呂南1号墓
磯砂山
日吉ヶ丘遺跡
蛭子山古墳
白米山古墳

第３章　京丹後市の縄文時代

京丹後市でもっとも古い遺跡は、約３万６千年前、後期旧石器時代の上野遺跡（丹後町上野）です。その後、今から１万２千年前に始まる縄文時代の遺跡としては、日本海の砂丘海岸に営まれた平遺跡（丹後町平）、浜詰遺跡（網野町浜詰・木津）、函石浜遺跡（久美浜町湊宮）、内陸部の裏陰遺跡（大宮町奥大野）などが知られています。

1 平遺跡

平遺跡発掘調査

平遺跡は、宇川河口の日本海に面した砂丘にある縄文時代の遺跡です。

昭和 38 年（1963）に同志社大学、昭和 40 年（1965）に帝塚山大学、平成８年（1996）・30 年（2018）には京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を行いました。

平式土器

調査の結果、厚さ４mにわたり縄文時代の土器、石器などの遺物が地層ごとに見つかり、約 3,000 年の長期にわたり継続して生活していた遺跡であることがわかりました。特に「平式土器」と呼ばれる縄文時代中期の土器は、渦巻きの模様や紡錘文が描かれており、学術的にも注目されています。

平遺跡出土土器

また、子供の棺桶である縄文時代晩期の埋甕や石組炉のほか、古墳時代の塩をつくる製塩土器や石敷の祭祀遺構がみつかりました。

2 浜詰遺跡

浜詰遺跡は、浜詰海岸の砂丘上にある縄文時代の遺跡です。昭和 33 年（1958）・令和元年（2019）に同志社大学、昭和 43 年（1968）に帝塚山大学、平成３年（1991）に網野町教育委員会が発掘調査を行いました。その結果、長辺 8.3m、短辺 5.8m の縄文時代後期の竪穴住居が発見されました。竪穴住居に

復元された浜詰遺跡の竪穴住居

は８か所の柱穴があり、住居の中央付近に石囲いの炉が設けられていました。この住居は、現地に復元されており、見学することができます。

また、京都府下で唯一の貝塚も発見されており、シジミ、ハマグリ、カキ、アサリ、サザエ、アワビなどの貝類、ボラ、コイ、クロダイ、スズキ、マグロなどの魚類、イノシシ、シカ、イルカ、サル、クジラなどの動物の骨やドングリが出土しています。当時の人が何を食べて生活していたのかがよくわかる資料です。

浜詰遺跡は、平遺跡とともに海岸の砂丘上にあり、京丹後市を代表する縄文遺跡です。

昭和 33 年　浜詰遺跡発掘調査

出土した動物の骨

３ その他の縄文遺跡

内陸部では、裏陰遺跡、正垣遺跡（大宮町奥大野）、谷内遺跡（大宮町谷内）、などがあります。

裏陰遺跡では、多数の縄文土器や石皿などの石器が出土しました。また海岸に近い松ケ崎遺跡（網野町木津）からは、オニバス、エゴマ、ヒョウタンなどの植物が発見されています。これらは栽培されていたかもしれません。

また、舞鶴市の浦入遺跡からは約 5,000 年前の大型の丸木舟が出土しており、当時の人々が外洋へと漕ぎ出して交易や漁業を行っていたと考えられています。

浦入遺跡出土の丸木舟

コラム　縄文土器の模様

縄文土器は、土器の中に縄目模様が描かれることから名づけられました。縄文土器は装飾模様も豊富で、土器の全面に模様を施した土器も多くあります。縄の撚りひもの種類によって、描かれる模様は異なります。

実際に縄を粘土の上で転がしたらどんな模様になるのかな？

模様を描く道具

縄目模様

第４章　京丹後市の弥生時代

奈具岡遺跡　各工程での水晶

京丹後市では、弥生時代の多くの遺跡の調査により、当時の様子がわかってきました。

集落遺跡では、竹野川河口の旧潟湖に面した竹野遺跡（丹後町竹野）で籾の痕の残る土器が見つかり、稲づくりが行われていたことがわかりました。弥生時代前期から中期初頭の高地性集落である扇谷遺跡（峰山町丹波）、中国の「貨泉」という新王朝（8 ～ 23 年）の貨幣が出土した函石浜遺跡（久美浜町湊宮）、弥生時代中期の玉つくり遺跡である奈具岡遺跡（弥栄町溝谷）、大規模な環濠が見つかった途中ケ丘遺跡（峰山町長岡）などが、代表的な集落遺跡です。

弥生時代の墳墓の調査により、当時のお墓の様子がわかってきました。弥生時代中期から後期にかけて、丹後では方形貼石墓や方形台状墓という墓が造られます。方形台状墓は小高い山や丘陵の尾根を平らに成形し、そこに墓穴を掘り木棺を埋葬するものです。

木棺の周りには、故意に割った土器を供える祭祀が行われていました。この祭祀の形は丹後を中心に丹波、但馬地方に分布しています。これに対して、この時期の畿内では、平坦な場所に区画のための四角い溝を設け、そこに木棺を埋葬する方形周溝墓という墓を造りました。

方形台状墓からは副葬品として、鉄器、ガラス玉など多くの遺物が出土します。特に鉄器の出土量は、きわめて多く、当時、北部九州に次いで、丹後は鉄の出土の多い地域となっています。この当時、日本にはまだ製鉄の技術がなく、中国・朝鮮から輸入していた時代であり、これらの国からもたらされたと考えられています。

また、首飾りや腕飾りに使われた多くのガラス玉が、弥生時代の丹後の墳墓から出土します。多いものでは、一つの棺から 600 個もの青い小さなガラス玉が出土します。このように多くのガラス玉を副葬するのも丹後の大きな特徴です。このような弥生時代の台状墓群には大山墳墓群（丹後町大山）、左坂墳墓群（大宮町周枳）、三坂神社墳墓群（大宮町三坂）などがあります。

大山墳墓群

弥生時代の丹後の墳墓からは、他地域の土器が出土します。大山墳墓群（丹後町大山）からは河内（生駒山西麓）産の土器が出土し、古天王墳墓群（弥栄町和田野）からも河内地域、東海地域の土器が出土しています。このように弥生時代の丹後が畿内地域などの物流にも大きく関わっていた証拠だと考えられています。

弥生時代後期末の赤坂今井墳墓（峰山町赤坂）からは、豪華なガラスの頭飾りが出土しました。弥生時代の丹後は、日本の中でも極めて進んだ技術をもった社会だったことが明らかとなってきています。

コラム　銅鐸

弥生時代の特徴的なものに銅鐸があります。銅鐸は、つり鐘に似た青銅の遺物で、弥生時代の祭りに使用されたものと考えられていますが、出土場所は、村の近くの丘などが多く、そこに埋められて発見されます。丹後地域では銅鐸の出土も多く、これまでに７つの銅鐸が出土しています。特に、梅林寺の銅鐸（与謝野町）は、高さ 1.07m と大型で流水文がある装飾性の高いもので、弥生時代後期のものです。ただ京丹後市からは、現在まで、銅鐸は発見されていません。

梅林寺銅鐸

１ 竹野遺跡と途中ヶ丘遺跡

竹野遺跡（丹後町竹野）は、竹野川河口の右岸の砂丘上にある弥生時代前期から中世まで続く集落遺跡です。弥生時代の籾痕の残る土器や箆で流水文の模様を描いた壺や陶塤（土笛）、糸をつむぐ紡錘車なども出土しています。特に古代の良好な港であった旧潟湖に面しており、古代から交易の拠点として栄えた村であったと推定されます。

鱒留川右岸の微高地にある途中ヶ丘遺跡（峰山町長岡）も、弥生前期から後期まで続いた環濠集落で、この地域で最も大きな集落遺跡です。

竹野遺跡の流水文土器

２ 扇谷遺跡

扇谷遺跡（峰山町丹波）は、丹後文化会館の位置する丘陵上にある、弥生時代前期末から中期初頭にかけての高地性集落です。発掘調査の結果、深さ４m にも達する深い二重の濠が、全長 850m にわたり確認されました。このような深い環濠は、外敵から村を守るための防御施設と考えられています。

この濠のなかからは、多量の弥生土器と共に

扇谷遺跡の深い環濠

陶塤（土笛）、鉄製品、鉄滓、ガラス原料、玉つくり関連資料などが出土しました。

これらから、高い技術を有した集団が生活していたと思われます。

扇谷遺跡の紡錘車

コラム　陶塤（土笛）

左が扇谷、右が途中ヶ丘遺跡の陶塤

陶塤は、弥生時代前期の今から２千年以上前の土笛で、日本全国で約 100 個出土しています。源流は中国と考えられ、卵形をしており、吹き口と前面に４つ、後面に２つの孔が空けられています。すべて日本海側の弥生時代前期の遺跡から発見されており、丹後半島が、出土の東限となっています。祭りで使われた祭器と考えられており、京都府では、京丹後市の扇谷遺跡（１個）、途中ケ丘遺跡（３個）、竹野遺跡（１個）で、合計５個が出土しているだけです。

３ 函石浜遺跡　中国の新の「貨泉」出土

函石浜遺跡

貨泉

銅鏃

函石浜遺跡（久美浜町湊宮）は、日本海に面した砂丘にある弥生時代を中心にした集落遺跡です。採集された資料には、縄文土器、弥生土器、銅鏃（銅のやじり）、土師器、須恵器や鉄鏃（鉄のやじり）、石剣、石やガラスの玉類、皇朝十二銭（708 年から 963 年にかけて日本で作られた十二種類の銅銭のこと）、明刀銭のほか、中国「新」王朝（西暦８年～ 24 年）のとき「王莽」が作った通貨の「貨泉」が出土しています。この中には大陸からもたらされたと思われるものも多く、日本海に面して港としての役割を持っていた遺跡と思われます。

４ 奈具岡遺跡　弥生時代中期の玉つくり遺跡

奈具岡遺跡（弥栄町溝谷）は、弥生時代中期の水晶や緑色凝灰岩の玉つくり遺跡です。

遺跡からは、96 基もの工房跡が発見され、原料の水晶の原石から玉になるまで各段階の製品や玉をつくるのに使用された鉄製の工具などが、多数出土しました。水晶玉には、小玉・そろばん玉・なつめ玉などがありました。水晶の玉つくり遺跡としては国内最古の

玉作り道具

ものとされています。

中国や朝鮮半島から入ってきたと考えられる鉄製工具類なども大量に発見され、九州北部よりも先に鉄加工の技術が伝えられたという説もあります。そして作られた水晶の玉類は、鉄との交易に使われたとも考えられています。

鉄製工具類

5 日吉ケ丘遺跡

日吉ヶ丘遺跡発掘調査

日吉ケ丘遺跡（与謝野町明石）は、野田川中流域の台地上にある弥生時代中期の長方形の方形貼石墓です。長辺 32m、短辺約 20m の墳丘の斜面に大小の貼石を置いています。

埋葬施設としては、組合式箱型木棺が置かれていました。

棺内から総数約 670 点以上 の大量の碧玉製管玉が、赤色顔料とともに発見されました。この方形貼石墓は、市内でも奈具岡遺跡や小池遺跡（大宮町善王寺）から見つかっています。

6 左坂墳墓群

左坂墳墓群（大宮町周枳）は、丘陵上にある総数 160 基ほどが確認された丹後地域最大の弥生時代後期の台状墓群です。

墳墓群全体の副葬品の総数は、武器としての鉄刀 2 点、鉄剣 1 点、刀子 4 点、装身具としてガラス勾玉 7 点、ガラス管玉 21 点、凝灰岩製の管玉 31 点、ガラス小玉 6,584 点となっています。赤色顔料も出土しました。

ガラスの勾玉、小玉

この墳墓群は、大陸製と思われる素環頭鉄刀および大量のガラス玉を副葬している点が大きな特徴といえます。

7 三坂神社墳墓群

3号墓 第10主体部

三坂神社墳墓群（大宮町三坂）は、竹野川右岸の丘陵の尾根上にあり、弥生時代後期に造られた6基の台状墓から構成されています。埋葬施設は木棺墓35基、土器棺4基の合計39基があります。

最も大きな墓穴の3号墓第10主体部がこの墳墓群の盟主の墓であり、素環頭鉄刀、やりがんな、鉄鏃のほか水晶玉、ガラス玉を用いた頭飾りなどが見つかっています。この他、墳墓群全体の出土遺物にはガラス勾玉、ガラス管玉、ガラス小玉、碧玉管玉などの玉類、武器と工具などの鉄製品、土器があります。丹後の弥生時代後期の方形台状墓を知るうえで重要な遺跡です。

素環頭鉄刀、やりがんな、鉄鏃

8 大風呂南1号墓

大風呂南1号墓遺跡発掘調査

大風呂南1号墓（与謝野町岩滝）は、阿蘇海を見下ろす丘陵上にある弥生時代後期の墳墓です。長さ27m、幅18m、高さ2mの台状墓で中心の埋葬施設は、長さ7.3m×幅4.3mの墓穴に長さ4.3m、幅1.3mの舟形木棺を納めていました。

ガラス釧

棺の中からは、ガラス釧1点、鉄剣11点、銅釧13点、貝輪1点、ガラス勾玉10点、碧玉管玉272点など豪華な副葬品が、発見されました。

特にガラス釧は、これまで北九州、出雲、丹後から7点出土しているだけの大変珍しいもので、このうち丹後では比丘尼城遺跡（大宮町三重）からも出土しています。これらのガラス釧の色はすべて緑色で、青色のガラス釧は大風呂南の1例だけです。また、銅釧は、北部九州地方からの交易品と考えられます。

９ 赤坂今井墳墓　弥生時代後期の丹後の王墓

第４埋葬の発掘調査

赤坂今井墳墓（峰山町赤坂）は、弥生時代後期に造られた方形の墳墓です。墳丘は、39m × 36 m、高さ 3.5 mを測り、まわりには幅５m～９mの平たんな場所があります。同時代では国内有数の大型墳丘墓です。

墳丘には、６つの埋葬施設（墓穴）がありました。中央に位置する第１埋葬は 14 m× 10.5 mもある大きなものです。２番目に大きな第４埋葬は７m× 4.4 mで、中には舟底状の木棺が納められていました。棺の中からは、頭飾りや耳飾り、鉄剣などが見つかり、一面に朱という赤色の顔料が敷きつめられていました。

頭飾りは、ガラス勾玉 22 個、ガラス管玉 57 個、碧玉管玉 39 個が規則正しく３連に並べられたとても豪華なものです。さらに、このガラス管玉には、美しい青に発色するよう古代中国で使用された「漢青（ハンブルー）」と呼ばれる成分（ケイ酸銅バリウム）がふくまれていました。

赤坂今井墳墓は、国内有数の大型墳丘墓であり、見つかった豪華な頭飾りなどから、近畿北部を代表する「王墓」とも言うべき重要な遺跡です。

出土した豪華な頭飾り

復元されたガラスの頭飾り

第５章　京丹後市の古墳時代

大将軍遺跡　蓋形埴輪

中国の魏の年号を持つ方格規矩四神鏡が大田南５号墳（峰山町矢田・弥栄町和田野）という方墳から出土し、邪馬台国の女王卑弥呼の鏡との関連が話題となりました。

古墳時代前期のカジヤ古墳は、竪穴式石室の埋葬施設を持つ古墳で、鍬形石などの豪華な腕飾りや筒形銅器が出土して、注目されました。

古墳時代前期末から中期にかけて網野銚子山古墳（網野町網野）と神明山古墳（丹後町宮）が築かれます。与謝野町の蛭子山古墳（与謝野町明石）とともに丹後の三大古墳と呼ばれ、蛭子山古墳、網野銚子山古墳、神明山古墳の順で築かれます。この中では、網野銚子山古墳が最も大きく、全長 201m を測り、日本海側で最大の古墳となっています。

古墳時代中期には、105m の黒部銚子山古墳（弥栄町黒部）が築かれます。また築かれた時期は不明ですが、湧田山古墳（峰山町丹波）も全長 100m の前方後円墳です。

産土山古墳（丹後町竹野）、離湖古墳（網野町小浜）などからは、地元産の凝灰岩で製作された古墳時代中期の王者の棺とよばれる長持形石棺が発見されました。

高山 12 号墳双龍環頭大刀把頭

後期の横穴式石室の湯舟坂２号墳（久美浜町須田）からは、双龍環頭大刀という豪華な大刀が発見され、高山 12 号墳（丹後町徳光）からも、同じく双龍環頭大刀の把頭が発見されました。

また古墳時代後期にはじまる製鉄遺跡の遠處遺跡（弥栄町木橋）が発見され、古代丹後地域は極めて進んだ技術を持った社会であることが明らかになりました。

画文帯環状乳神獣鏡

１ 大田南２号墳と画文帯環状乳神獣鏡

大田南２号墳（弥栄町和田野）は、巨大古墳が築かれる以前、３世紀中葉の古墳です。この古墳からは、鉄剣や壺、台付き鉢、器台などの土器とともに、直径 14.5cm

の画文帯環状乳神獣鏡という中国製の銅鏡が出土しました。鏡は、中央の鈕にひもが通され、布に巻かれた状態で副葬されていました。日本では、瀬戸内海東部から近畿地方を中心に出土しています。製作は、２世紀後半から３世紀初めと思われます。

５号墳の青龍三年の鏡とともに、丹後における古墳時代前期の歴史を考えるうえで、きわめて重要な遺物です。

２ 大田南５号墳と青龍三年銘方格規矩四神鏡

青龍三年銘方格規矩四神鏡

大田南５号墳は、３世紀後半の古墳で、平成６年（1994）発掘調査の結果、石棺から青龍三年銘方格規矩四神鏡が出土しました。鏡には布片が残っていて、調査の結果、「絹織物」であることがわかりました。鏡は絹織物にくるみ、木箱のような入れ物に入れて、石棺の中におさめられたものと考えられています。

また、この銅鏡には、中国三国時代の魏の年号である「青龍三年」という文字等が記されていました。これは、西暦 235 年にあたります。邪馬台国の女王、卑弥呼が魏に使いを送ったのが４年後の 239 年で、翌年に 100 枚の銅鏡をもらって帰ったことから、この鏡が出土した当時、卑弥呼の鏡ではないかと大変話題を集めました。鏡には、玄武、朱雀、青龍、白虎の４匹の伝説上の神獣の模様などが描かれています。

現在、日本で発見された年号を持つ鏡としては、最も古いものです。

大田南５号墳石棺

３ カジヤ古墳

カジヤ古墳（峰山町杉谷）は、長径約 73m、短径約 55m、高さ約９ｍの楕円形をした大型の円墳です。昭和 47 年（1972）土木工事により発見されました。竪穴式石室や木棺をおさめた４つの埋葬施設が見つかり、豪華な副葬品が発見されました。

副葬品は銅鏡・鉄器類・玉類・石製腕飾類で、特に注目されるのは、鍬形石・車輪石・石釧の

カジヤ古墳出土遺物

石製腕飾類が一括して出土したことで、丹後・丹波地域では、唯一の例となっています。権威を示す玉杖の部品とされる筒形銅器も発見されました。畿内との交流を深めつつあった４世紀における当地方の有力者の遺品としてきわめて重要です。

４ 浅後谷南遺跡

出土した浄水施設の木槽樋

浅後谷南遺跡（網野町公庄）は、日本海へ注ぐ福田川中流域の弥生時代から平安時代まで続く集落遺跡です。この遺跡では、古墳時代前期（４世紀）の川の跡が見つかり、水辺のまつりが行われていたと考えられています。

川の跡からは、水をせき止める施設や、導水施設のほか、舟形、鳥形や円形の木製品などが見つかりました。導水施設は、水を板でせき止め、中央のＶ字の切り込みから上澄みだけを全長 3.5 mの木槽樋に流すものです。中央には楕円形の木槽が設けられ、ここでさらに不純物を沈殿させ、まつりに使う清らかな水を得たと考えられています。

このような導水施設は、当時の人々の信仰を考える上で貴重な資料と言えます。

５ 蛭子山古墳

蛭子山古墳舟形石棺

蛭子山古墳発掘調査

蛭子山古墳（与謝野町明石）は、古墳時代４世紀中頃の前方後円墳です。大きさは 145m の３段築成で、葺石や埴輪を持っています。埴輪には丹後型円筒埴輪や朝顔形埴輪や短甲形埴輪があります。埋葬施設は、舟形石棺と竪穴式石室、木棺の３基が見つかりました。花崗岩の舟形石棺が中心の埋葬施設で、棺内から中国製の後漢鏡や鉄刀などが発見されました。丹後三大古墳の一つとして重要な古墳です。

コラム　年輪年代法

遺跡の年代は、一般的に出土する土器の形式から判定していますが、出土する木材の年輪から年代を測定する方法もあります。木の年輪は気象条件により生育の良い年には幅が広くなり、生育の悪い年は狭くなります。その変化を何十年、何百年の期間で追っていくと、年輪幅の変化がパターンとなって現れます。いわば樹木の年輪による年代のモノサシができます。研究により、現代から過去 2,000 年前の弥生時代までの年輪のモノサシができ上がっています。これにより、

①池上曽根遺跡（大阪府和泉市）は、弥生時代中期の集落遺跡で、東西 17 m、南北 7 mの大型の建物が出土し、柱の 1 本が紀元前 52 年に伐採されたことがわかりました。これまで考えられていた年代よりも 100 年もさかのぼることになります。

②世界最古の木造建築である法隆寺五重塔の心柱の伐採年代が 594 年と判定されました。

③聖武天皇の紫香楽宮の造営年代がヒノキ柱から 742 年と判定され、『続日本紀』の内容と一致しました。

これ以外にも古墳で出土した木材の判定結果から、古墳の出現時期が早くなるのではないかと考えられています。

池上曽根遺跡の建物

6 網野銚子山古墳

網野銚子山古墳と網野市街地

網野銚子山古墳（網野町網野）は、墳丘の大きさが 201m あり、日本海側で最も大きな前方後円墳です。古墳は 3 段に造られており、それぞれの斜面には葺石が置かれています。

墳頂部や斜面と斜面の間の平らなテラスには約 2,000 基の埴輪が並べられています。古墳の南側には幅 17m から 25m の濠がめぐらされています。

隣には、直径 36m の小銚子古墳と寛平法皇陵古墳の 2 基の古墳があります。

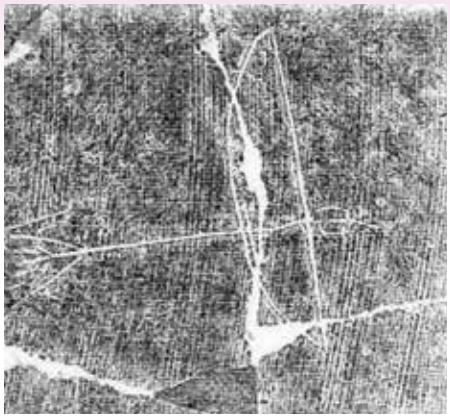
網野銚子山古墳、小銚子古墳からは、同じ形態をした丹後型円筒埴輪が見つかっています。網野銚子山古墳の丹後型円筒埴輪は、底の直径が 30 ～ 40cm、高さ 93 ～

網野銚子山古墳葺石
（昭和 60 年度調査）

網野銚子山古墳葺石
（平成 20 年度調査）

95cm を測る大きなものです。弓と矢や龍と思われる線刻を持つ埴輪も出土しています。４世紀後半に造られた巨大な古墳です。

網野銚子山古墳丹後型円筒埴輪



埴輪に描かれた弓と矢の線刻

７ 神明山古墳

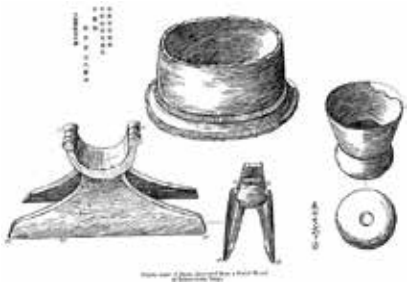
神明山古墳

神明山古墳は丹後町宮にある前方後円墳です。古墳の大きさは、190m ありテラスが３段に造られています。墳頂部に石材が散らばっており、竪穴式石室が築かれている可能性があります。丹後型円筒埴輪も確認されています。出土品として注目されるものに椅子、小さな壷を形どった石で作られた模造品も出土しています。

神明山出土の舟と人が描かれた埴輪

また埴輪の表面に、へらで絵を描いたものがあり、舟と舟をこぐ人物が表わされています。当時、舟が重要なものであった証拠だと思われます。

古墳の築造時期は、４世紀末から５世紀初頭で網野銚子山古墳よりも少し新しい古墳です。蛭子山古墳、網野銚子山古墳とともに丹後の三大古墳となっています。



石でつくられた模造品の図

コラム　潟湖

このような巨大古墳が、なぜこの地に造られたのかは大きな謎ですが、二つの古墳に共通しているのは、古墳の下に広がる平地が、古代では砂州で外海と切り離された潟湖で、良い港であったと考えられていることです。

丹後地方は、日本海ルートを通して、大陸や朝鮮半島と交易を行い、また日本各地との交流により、多くの先進的な文物や技術を入手し発展したと考えられています。

空から見る竹野川河口流域

たとえば、弥生時代には、日本には鉄を生産する技術はなく、朝鮮半島や中国大陸から鉄製品や鉄の材料を入手していましたが、この潟という天然の良港が、その受け皿となり、丹後にも船によって鉄器などが運ばれてきたものと考えられています。

このような丹後半島の地形的特性が、大和政権によって重要視され、大和政権が大陸や朝鮮半島との交易を行う拠点として丹後を位置づけたために、丹後の地にこれだけ大きな古墳が築かれたと考えられるのです。

このことも、古代丹後地域に日本列島規模でみても大きな勢力があったことを示す根拠のひとつといえます。

小銚子古墳出土の
丹後型円筒埴輪

コラム　丹後型円筒埴輪

丹後型円筒埴輪は、埴輪の頂部がドーム状となり、中央が丸く開いている円筒埴輪で、丹後の古墳でのみ使用される特殊な円筒埴輪です。

京丹後市の古墳では、網野銚子山古墳、神明山古墳、小銚子古墳の３基の古墳に確認されているだけです。また野田川流域では、蛭子山古墳、法王寺（ほうおうじ）古墳、作山１、2、３号墳、鴫谷東（しぎたにひがし）３号墳、温江百合（あつえゆり）３号墳の７基の古墳が知られています。丹後の三大古墳など大きな古墳に採用されており、古墳時代の丹後の首長は、この形の円筒埴輪を古墳に据えました。

8 黒部銚子山古墳

黒部銚子山古墳

黒部銚子山（くろべちょうしやま）古墳は、弥栄町黒部（くろべ）にある大型前方後円墳で、葺石（ふきいし）や円筒埴輪（はにわ）が確認されています。規模は全長 105m で、墳丘の残りぐあいは良好で、非常に整った形をしています。発掘調査が実施されていないため、内部施設、副葬品（ふくそうひん）については不明です。古墳が築かれたのは古墳時代５世紀前半と考えられ、神明山（しんめいやま）古墳に続く、丹後の王の墓です。丹後地方の古代豪族の勢力や古墳文化を知る上で大変重要な古墳です。

9 産土山古墳

産土山（うぶすなやま）古墳（丹後町竹野（たかの））は、旧竹野小学校校舎の隣にある５世紀中頃に造られた古墳です。大きさは直径 55m で２段に造られた円墳です。昭和 14 年に発掘調査が行われ、長持形石棺（ながもちがたせっかん）という立派な石の棺（ひつぎ）が発見されました。

中からは埴製枕（はにせいまくら）（土を焼いて作った枕）、環頭刀子（かんとうとうす）（柄（つか）の先に

産土山古墳長持形石棺

飾りの環がついた小刀)、銅鏡（変形四獣鏡という日本製の鏡)、ヒスイやメノウの勾玉、碧玉の管玉などの玉類、鉄鏃（鉄のやじり)、木の櫛や木の弓などが出土しました。円筒埴輪のほか、盾形や家形などの形象埴輪も発見されています。５世紀の中頃に丹後地域を支配した王の墓です。

埴製枕と玉類

コラム　王者の棺

離湖古墳石棺（底石）

長持形石棺は、主に畿内の古墳時代５世紀の大王墓に使われた石棺で、九州から関東地方でも地方の有力者の古墳に使われています。「王者の棺」と呼ばれ、組合式石棺と同様に底石の上に短辺側石をはさみこむように長辺側石を組み、それに蓋石をかぶせる構造で、６石でできています。それぞれの石には、縄掛突起をつくりだしたものもあります。

京都府下では、長持形石棺として６例が知られており、そのうち４例が京丹後市にあります。産土山古墳、馬場の内古墳、願興寺５号墳、離湖古墳の４例です。石材は、畿内の石棺が播磨の竜山石で製作されるのに対して、丹後の長持形石棺は地元産の凝灰岩で製作されています。

10 ニゴレ古墳

船形埴輪

ニゴレ古墳（弥栄町鳥取）は竹野川流域から離湖に通じる道沿いにある長さ20m、高さ３～４ｍの不整形な形をした５世紀中頃の古墳です。発掘調査の結果、船形、甲冑形、椅子形、家形の形象埴輪や鉄製の甲冑が出土しました。また、円筒埴輪と朝顔形埴輪も出土しました。特に、船形埴輪は外海を航行できる準構造船を模したものであり、近くの潟湖に入港していた船をモデルにした可能性もあり、興味深いものとなっています。

甲　冑

11 湯舟坂２号墳

湯舟坂２号墳石室発掘調査

環頭大刀の把頭

湯舟坂２号墳（久美浜町須田）は、川上谷川の支流伯耆谷川の左岸にある古墳時代後期（６世紀後半）の横穴式石室を持つ古墳です。

発掘調査の結果、200 点をこえる須恵器、鉄器、装身具などの副葬品が発見されました。金銅装環頭大刀は、全長 122cm のたいへん豪華な装飾のある刀です。柄の頭に飾りの環を持ち、内側には互いに玉をくわえる２対（４匹）の龍があらわされています。残りもよく、金色に輝く様子は、この刀を持つ豪族の力の大きさをしめすものです。そのほか、銀装圭頭大刀という豪華な刀や鉄鏃、馬具、金環（耳飾）、銅椀、土師器や須恵器など大量の遺物が発見されています。

12 遠處遺跡

遠處遺跡発掘調査

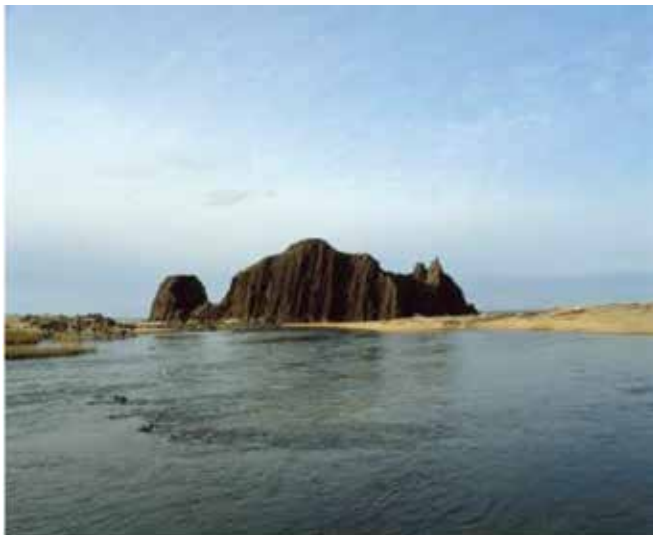
遠處遺跡（弥栄町木橋）は、古墳時代および奈良時代後期から平安時代前期にかけての製鉄遺跡です。古墳時代後期の竪穴住居跡（47 基以上で鍛冶炉をもつものもある）や奈良時代から平安時代に移り変わる時期の製鉄、製炭（炭焼き）、鍛冶などの鉄生産と須恵器生産にかかわる多くの遺構が見つかりました。製鉄には大量の木炭が必要で、付近から 130 基近い炭窯が見つかっています。

また、製鉄の際に出る鉄滓（鉄かす）の中から、６世紀後半の須恵器が出土していることや６世紀終わり頃の炭窯も発見されていることから、遠處遺跡では６世紀後半には製鉄が行われていたと考えられ、わが国でも最古級の製鉄遺跡とされています。

遠處遺跡は、古代の製鉄コンビナートとでもいうべき遺跡であり、古代丹後の進んだ技術を物語るものです。

第６章　古代の丹後

１ 古事記・日本書紀に記される古代丹後



立　岩

『古事記』（712 年）、『日本書紀』（720 年）は、大和朝廷を中心にして書かれたものですが、古代の丹波（丹後）に関しての内容も多く見られます。

このことは、古代における大和政権と古代の丹波（丹後）との間に深い関係があったことを示しています。では、『古事記』『日本書紀』には丹波（丹後）に関して、どのような内容が書かれているのでしょうか。

① 丹波大県主 由碁理と竹野媛

竹野神社

和銅６年（713）に丹波を２つに分けて、丹波国と丹後国が誕生します。それ以前は、私たちの住む丹後は、丹波（現在の丹後と丹波の領域）と呼ばれていました。『古事記』では、旦波（丹波）大県主由碁理という豪族が登場します。そして、その娘が竹野比売（媛）であり、９代開化天皇の妃となります。竹野神社の伝承によると、竹野神社はこの竹野媛が年老いて郷土にもどり、この神社を創建したと伝えています。927 年にまとめられた延喜式神名帳という、当時の官社であった全国の神社一覧において、大社として位置づけられています。

② 彦坐王と玖賀耳之御笠

『日本書紀』によると、開化天皇と姥津媛との間に生まれたのが彦坐王であり、彦坐王の子が丹波道主王となります。

彦坐王（『古事記』では日子坐王）について、『古事記』では玖賀耳之御笠という丹波の一族を征伐したと記されています。

③ 四道将軍と丹波道主王

久美浜兜山

丹波道主王は彦坐王の子で９代開化天皇の孫にあたります。では丹波道主王とはどういう人物でしょうか。『日本書紀』には、10代崇神天皇が派遣した四道将軍の一人として、丹波へ遣わされたと記されています。

この記事によると、丹波道主王は大和朝廷から遣わされた大和出身の将軍ということになります。しかし、それは後になってから、地方の首長の祖先を大和朝廷に結び付けたものと考えられ、丹波道主王は、もともと丹波（現在の丹後・丹波）の有力な王であったと思われます。

④ 丹波道主王と河上摩須郎女と丹波の五女

『古事記』では、丹波道主王は河上摩須郎女をめとって、３人の娘（比婆須比売命、真砥野比売命、弟比売命）と朝廷別王を生んだと記されます。（『日本書紀』では５人の娘日葉酢媛、渟葉田瓊入媛、真砥野媛、薊瓊入媛、竹野媛）

３人（『日本書紀』では５人）の娘は11代垂仁天皇の妃となり、比婆須比売が皇后となったと伝えられています。

河上摩須郎女は、その名前から久美浜の川上谷川流域を支配していた豪族の娘と推定されています。

２ 海部氏系図と海部直の伝承

久美浜湾

古代の日本海沿岸には、舟をあやつり航海技術を身につけた海人が活動していました。それを統括したのが海部氏で、大和政権は海部直を丹波国造に任じています。

久美浜町には海士と呼ばれる地区があり、久美浜湾という天然の良港を背景にして海部一族の拠点があったと推測されます。

丹後国の一の宮である、宮津市の籠神社には、日本最古の系図として国宝に指定されている「海部氏系図」があります。この系図は平安時代初期の貞観年中（859～877年）に書き写されたものです。縦系図という、直系の子孫だけを縦に記録したものです。こ

海士の矢田神社

の系図には始祖の彦火明命から平安時代初期の海部直田雄祝までが記載されており、各代の宮司（祝）の上に「丹後国印」の朱印が押されていました。つまり、この系図は海部氏が作成して丹後国庁に提出されて認められたものであることを示しています。

この海部氏の系図にまつわる伝承によると、海部氏が祭神を熊野郡から与謝郡に分祀したのは、養老年中（717 ～ 724 年）であるとされています。久美浜町海士の矢田神社には海部氏の祖である建田背命が祀られており、地域の伝承にも残されています。内容の検証が十分ではありませんが、非常に興味深い内容だと考えられます。

コラム　「丹後王国論」

明治 31 年　網野銚子山古墳

「丹後王国論」は、門脇禎二氏により 昭和 58 年（1983）に発表され、大きな反響を呼びました。門脇氏の説は、ヤマト政権によって統一される以前の弥生時代から古墳時代にかけて、京丹後市の峰山盆地を中心として、野田川･竹野川･福田川・川上谷川各流域をふくめた地域に地域国家が存在していたというものです。

門脇氏は、王国や地域国家が成立するためには、次の三つの条件が必要だと考えました。

1 地域における王権と、その支配体制があること
2 定められた支配領域があること
3 独自の文化や支配イデオロギー（その中で信じられている信仰、独自の風習など）があること

古代において、日本にはいくつかの地域国家があったと考え、その中の一つとして丹後王国（丹波王国）が存在したとしています。

『古事記』『日本書紀』に丹後関連の記述が多いことから、丹後の王の系図を示し、王権があった証拠だとし、初代 大県主由碁理から 4 代 丹波道主王、5 代 朝廷別王など 5 代にわたる王が竹野川流域を支配したと考えました。

そして、丹後王国の領域については、西は久美浜の川上谷川流域、南は氷上郡（現在の兵庫県丹波市）、東南は野田川流域など広大な範囲におよび、この地域には網野銚子山古墳、神明山古墳、蛭子山古墳といった巨大古墳や重要な遺跡が分布していることを重視し、また峰山町に丹波という地名が残されていることから、丹後王国の中心は、この丹波（丹波国丹波郡丹波郷）にあったと判断しました。

この門脇氏の「丹後王国論」は、その後の丹後の研究に大きな影響を与え、地域振興や観光においてもよく取り上げられています。

３ 丹後国の誕生

竹野遺跡出土の墨書土器

丹後国は、和銅６年（713）に丹波国の五郡を割いて置かれたことがわかっています（『続日本紀』より）。加佐郡、与佐（与謝）郡、丹波郡（後に中郡）、竹野郡、熊野郡の５つです。

それ以前は、後の丹波国、丹後国の両方を併せた範囲が丹波国でした。この広大な丹波国の中心は、いったいどこにあったのでしょうか。丹後地方には、巨大な前方後円墳が集中していることから、丹波国の本拠地、あるいは中心は、丹後国の領域にあったと推定されています。また、峰山町に丹波という地名が残っていることにより、この丹波の地が、当時の中心的な場所だと指摘されています。

古墳の動向を見ると、神明山古墳に続く古墳時代中期の黒部銚子山古墳（105m）では、古墳の規模が半減しています。全国的に見ると、中期になり畿内の大王墓が大型化するのと対照的です。従って中期以降、丹波国の中心が南側の後の丹波国地域に移動していたのではないかと考えられています。713 年以降の丹波国の国府の正確な位置は、まだよくわかっていませんが、亀岡市か又は南丹市にあったと推定されています。

一般的に国を分割するのは、支配する側が、強大な地域の勢力を分割して、力を弱める目的と行政上において便利なように分割する目的などによっていますが、丹後国の分国については、国の行政の中心から遠いこと、交通上不便であったことが、その理由ではないかと推定されています。

誕生した丹後国の行政の中心となる丹後国府が、どこにおかれていたのかもよくわかっていません。一般的に役所が置かれていた場所からは、硯（円面硯）や文字の書かれた土器（墨書土器）などが出土します。また、役人が使用していた道具や役所の建物などの遺構も検出されます。今後の発掘調査によって、丹後国府が置かれていた場所が、解明される日が来ることを期待しています。

４ 寺院の建築と俵野廃寺

俵野廃寺（網野町俵野）は、７世紀後半に創建された飛鳥時代から奈良時代にかけての丹後唯一の寺院です。俵野川の改修工事により、お寺の塔の礎石が発見され、鬼瓦など、寺院に使用された瓦も多数見つかりました。

軒丸瓦という屋根の軒先に使用される瓦の模様に

俵野廃寺の塔の礎石

は、蓮の華を表現した瓦が２種類確認されています。特に、この寺院独自の簡易な７葉の蓮華文の瓦は注目されます。また、発見された鬼瓦には、稚拙な表現で目と鼻と思われる顔が描かれ、下の方には開いた足のようなものが描かれています。

また、平安時代の須恵器や土師器などの土器も確認されており、俵野廃寺が、平安時代まで営まれていたことが推定されています。

俵野廃寺の鬼瓦

俵野のある木津の地は、「津」という地名からして古代においては港として利用された場所だと考えられています。この寺院は、この港と物資の交易を通じて、発展した有力者が創建したと考えられます。

簡易な蓮華文の軒丸瓦

蓮華文の軒丸瓦

５ 国分寺・国分尼寺の建築

丹後国分寺　塔の礎石

６世紀に日本に仏教が伝えられ、蘇我氏や大陸からの渡来人などにより仏教が崇拝され、飛鳥寺をはじめとする寺院の建築が開始されました。その後、寺院の造営は各地の豪族によって、全国に広まっていきます。

７世紀中頃に築造が終わった古墳に替わって、寺院の建築が豪族の権威を示すものとなりました。

特に、聖武天皇は仏教を厚く信仰し、天平 13 年（741）に国分寺建立の詔を出して、国ごとに国分寺・国分尼寺を建立しました。丹後の国分寺は、天橋立を見下ろすことのできる宮津市国分に建築されました。現在の金堂と塔の礎石は、室町時代に再建された建物に伴うもので、この下に創建当時の寺院が埋まっていると想定されます。ただし、丹後の国分尼寺の場所はわかっていません。

6 渤海使と横枕遺跡

離湖と横枕遺跡

日本と大陸、朝鮮半島との交流は、渤海使の記録にも見ることができます。渤海は中国東北部に大祚栄が698年に建国した国で、926年に滅亡するまでの200年間に34回、わが国に渤海使を派遣しています。

そして、延長7年（929）には3度目の来日となる大使斐璆ら93人の使節団が乗った一隻の船が丹後国竹野郡大津浜に到着しています。この大津浜がどこなのかは解っていませんが、都から派遣された役人が使節団と応対する中で、渤海国が滅ぼされて東丹国になったことを知ることになります。このため、朝廷は使節団が京の都へ入ることを許さず、丹後から東丹国に帰されたと記録されています。

一方、古代の港の役割を果たしていた離湖（網野町）の東岸にあたるところに、横枕遺跡があります。遺跡からは、平安時代の釉薬を塗った陶器類や風字硯という硯や、当時は貴重品であった中国製の磁器などのほか、銅製帯金具や碁石、鍛冶などに関連する遺物も確認されています。これらの出土品は、一般の集落からはほとんど出土しないもので、特別な集落であった可能性が高いことから、入洛できなかった東丹国の使節団が滞在した客館跡がこの横枕遺跡ではないかと指摘されています。

コラム　木簡

平城京跡から、京丹後市の各地から届けられた産物を示した木簡が出土しています。

木簡の多くは、今でいう荷札ともいうべきもので、弥栄町芋野から赤米を納めたときの木簡が見つかっています。「丹後国竹野郡芋野郷媯部古与曾赤春米五斗」と記され、赤米5斗が造酒司（酒の役所）に納められています。また、「丹後国竹野郡間人郷土師部乙山中男作物海藻六斤」と記された木簡からは、間人から海藻六斤（注：1斤は600g）が送られていたことがわかります。

芋野郷

赤春米

←

7 平安時代の仏像

平安時代には、日本独特の風土や環境によって、日本独自の文化が生み出されました。これを国風文化と呼び、宇治の平等院鳳凰堂と阿弥陀如来像に代表される仏教芸術も生み出されました。

京丹後市にも各寺院を中心に優れた仏像が伝えられています。縁城寺の千手観音菩薩立像と円頓寺の薬師如来坐像は、丹後の平安時代の代表的な仏像です。

縁城寺は峰山町橋木にある真言宗の寺院で、寺伝によると養老元年（717）にインドの僧である善無畏三蔵が開いたと伝えられています。本尊の千手観音菩薩立像は、像の高さが 152cm の一木造の像で、平安時代 11 世紀に制作されたと思われる優れた仏像です。

円頓寺　薬師如来坐像

円頓寺（久美浜町円頓寺）の薬師如来坐像の高さは 84cm、両脇侍像である日光・月光菩薩像の高さは約 140cm です。寄木造りで、定朝様という当時の穏やかで優美な作風の仏像で、平安時代末期に製作されたものと推定されます。

成願寺（丹後町成願寺）の薬師如来坐像及び両脇侍像も、定朝様の優れた仏像です。

縁城寺　千手観音立像

成願寺　薬師如来坐像、両脇侍像

第７章　中世の丹後

１ 荘園などの地名

中世の土地制度の特徴は、10 世紀以降に成立した荘園制です。鎌倉時代はこの荘園制が定着･固定化していく時期です。鎌倉時代から室町時代にかけて丹後国内にあった郷･保･荘園などは、長禄３年（1459）の「丹後国諸庄郷保惣田数帳」（丹後国田数帳）に記されています。丹後国にある荘園は、加佐郡６荘、与謝郡６荘、丹波郡２荘、竹野郡５荘、熊野郡６荘の合計 25 荘となっています。

その内、京丹後市の荘園については、丹波郡（後の中郡）の倉垣荘、吉原荘、竹野郡の楽音寺荘、木津荘、鳥取荘、島荘、船木荘と、熊野郡の川上荘、川上新荘、佐野荘、鹿野荘、田村荘、久美荘の 13 ヵ所がありました。丹後国田数帳に記される荘園は、もとは京都･奈良などの寺社のものでしたが、鎌倉時代から室町時代にかけて武士が台頭してきたこともあり、少しずつ武士の所領になっていきます。京都・奈良などの寺社の荘園であった名残りは、各地に残る神社に見ることができます。木津荘の加茂神社（網野町木津）は下賀茂神社（京都市）、鹿野荘の鹿野八幡神社（久美浜町鹿野）、佐野荘の矢田八幡神社（久美浜町佐野）、平荘の平八幡神社（丹後町平）は石清水八幡宮（八幡市）の荘園であった時代に祀られたと思われます。

併せて郷、保、荘園の名前を見ると、現在の大字地名が多く見られます。現在に残る地名は、古代にさかのぼるものもありますが、この時期にできあがったものが多いことがわかります。※「荘」は、「庄」と書かれる場合があります。

２ 本願寺本堂

本願寺本堂

本願寺（久美浜町十楽）は、奈良時代に行基が開いたと伝える浄土宗の古いお寺です。この本堂は、丹後で最も古い木造建築であり、鎌倉時代後期のものと考えられています。檜皮葺の屋根がゆるやかな曲線を描く美しい建物です。

本願寺の本尊の阿弥陀如来立像は鎌倉時代初期の仏像であり、絵画や古文書も鎌倉時代の古いものが伝わっています。本願寺のある久美浜一区は、久美荘と呼ばれ、後白河法皇の持仏堂であった長講堂（京都市東山区）の荘園でした。

３ 南北朝時代の合戦

鎌倉幕府が滅び、京都の北朝と吉野の南朝が対立する南北朝時代が 50 年以上続くことになります。

鎌倉幕府滅亡時の丹後では、熊谷直経という武士が、熊野郡の浦家（浦明）、浦富保、竹野郡の木津郷、木津庄、船木庄、丹波郡の丹波郷、光安保の城と善王寺を焼き払ったことを記した文書があります。（元弘３年（1333）５月「熊谷直経代直久軍忠状」）

このように南北朝時代には、すでに丹後各地に城があったことがわかります。その後、南北朝時代の動乱期には、成相寺（宮津市成相寺）や加悦の市場、田辺城（舞鶴市）において合戦があった記録が残っています。

コラム　一遍上人と久美浜の龍神伝承

鎌倉時代、踊念仏を唱えれば、すべての人が救われると説き、時宗を開いた一遍上人は、弘安８年（1286）５月上旬に「丹後の久美の浜」を訪れています。一遍上人が念仏を唱えると、龍が波の中から出現したと伝えています。「久美の浜」は、現在の久美浜一区のうち西本町、東本町あたりと推定されています。

京丹後市で時宗にかかわる資料としては、平八幡宮（丹後町平）の鰐口や安楽寺（丹後町此代）の石造物があります。

４ 室町時代から戦国時代の丹後

建武３年（1336）、足利尊氏は一色範光を丹後国の守護に任命しました。一色氏は、応仁の乱の後、丹後府中（宮津市府中）に守護所を置きました。有名な雪舟の「天橋立図」は、16 世紀初頭の丹後府中の景観を描いたものとしても貴重です。その後、一色氏は内紛を起こし、それに乗じた隣の若狭国（福井県）武田氏が何度も丹後国を攻めます。永正 14 年（1517）には、丹後府中から吉沢城（弥栄町吉沢）や堤籠屋城（弥栄町堤）へと武田氏が侵入し、合戦が行われました。地元に残る「坪倉家文書」には、この合戦と思われる内容が記されています。

天文７年（1538）につくられた『丹後国御檀家帳』には、丹後守護一色氏を頂点に、「国の御奉行」と呼ばれた石川氏（加悦）、伊賀氏（久美浜）、小倉氏（宮津）がいて、「国のおとな衆」井上氏が守護のもとにあり、各地に城持ちの「城主」が点在している様子が記されています。

稲葉家本『丹後国御壇家帳』

5 中世、戦国時代の山城

シミズ谷城の発掘調査

中世、戦国時代に丹後には多くの山城が築かれました。山城は、武力に伴う緊張が生じた場合に使用されたものです。城主は、ふもとで生活し、戦いになると山の城にたてこもるという防御用の施設とされます。構造は、山の上を平らに削り、建物を建てる敷地を造りました。これを曲輪（郭ともいう）と呼び、複数の曲輪を連ねる構造のものもあります。また敵の侵入を防ぐための堀切（大きな溝）などを備えていました。しかし、近世に見られるような石垣はまだ使われていません。

弥栄町堤地区は、若狭武田氏の侵入に伴った合戦の舞台となったことが知られています。この地区のシミズ谷城跡は、発掘調査により、掘立柱建物跡、鍛冶炉などの遺構や、瀬戸焼、美濃焼、青磁椀などの陶磁器、土師器などが出土しています。

6 供養塔とお墓

室町時代から戦国時代にかけて、生前に死後の供養を行う逆修という風習が盛んに行われ、多くの供養塔が建てられました。市内の代表的なものには、享禄４年（1531）に福昌寺（弥栄町黒部）の境内に建てられた十三仏石塔や永禄７年（1564）に大宮町森本に建てられた立石大逆修塔などがあります。

立石大逆修塔

室町時代から戦国時代のお墓には、火葬した骨を納めた上に石で造った五輪塔や板碑を立てたものが見つかっています。この時期のお墓としては、福井遺跡や地蔵山遺跡（いずれも与謝野町）があります。市内では、水戸谷遺跡（大宮町三重）があり、五輪塔や板碑（お地蔵さん）がお墓に立っています。

なお、土葬のお墓の上に墓石が立つ風景は、江戸時代の 17 世紀後半から 18 世紀前半に入ってから定着するものです。

7 中世における京丹後市の文化財

縁城寺　宝篋印塔

大宮売神社　石灯籠

本願寺　阿弥陀如来立像

京丹後市には、鎌倉時代、室町時代に製作された石造物、仏像、絵画、工芸品などの文化財が寺院や神社を中心に伝わっています。

石造物では、正平６年（1352）に作られた縁城寺の宝篋印塔、徳治２年（1307）に作られた大宮売神社の石灯籠があります。

仏像では本願寺の阿弥陀如来立像（鎌倉時代）、絵画では岩屋寺（大宮町谷内）の五大尊像、釈迦十六善神像（鎌倉時代）、本願寺の当麻曼荼羅図（南北朝時代）などがあります。また修験者のリュックとでもいうべき縁城寺の金銅装笈（室町時代）などもあります。

縁城寺金銅装

本願寺　当麻曼荼羅図

岩屋寺　五大尊像

岩屋寺　釈迦十六善神像

第８章　近世の丹後

１ 細川藤孝・忠興の丹後支配

細川幽斎像

細川忠興像

天正７年（1579）、織田信長は、明智光秀、細川藤孝・忠興親子に丹波丹後の平定を命じます。明智光秀は丹波を支配し、細川藤孝・忠興父子は１年がかりで、丹後守護の一色氏を支配下に置きました。

翌年の天正８年（1580）には、細川氏は宮津城の築城に取りかかり、城下町の建設も行われました。

天正 10 年、織田信長が本能寺で明智光秀に討たれます。その知らせを聞いた細川藤孝・忠興は頭を剃り、信長の死をいたみました。この時、明智光秀より味方となるように求められますが、細川藤孝はそれを断り、幽斎と名を改めて隠居して、家督を子の忠興に譲り、舞鶴の田辺城に移りました。忠興は、妻であり明智光秀の娘でもある玉子を弥栄町味土野の山の中に閉じ込めたと伝えています。この後、細川氏は、一色氏を滅ぼし、約 20 年にわたり丹後を支配しました。

慶長５年（1600）、石田三成方の軍勢 15,000 人が丹後に攻め入った際に、細川幽斎は、田辺城に 500 人の兵とともに立てこもり籠城戦となりました。

細川幽斎は、茶道や文芸に秀でた文化人で、特に『古今和歌集』の用語解釈や読み方を理解する古今伝授の伝授者でありました。

幽斎が死んで、古今伝授が途絶えてしまうことを心配した八条宮智仁親王や後陽成天皇の取り計らいにより、敵方も包囲を解き、細川幽斎も籠城をやめます。この細川幽斎の田辺籠城は有名な出来事です。

その後、関ヶ原の戦いの功績により、細川家は豊前中津（大分県）へ国替となりました。替わって京極高知が田辺城に入り、丹後を支配することとなりました。

２ 細川ガラシャと味土野

細川忠興の妻、玉子（玉）は、永禄６年（1563）、明智光秀の３女として生まれました。

天正６年（1578）、16 才の時、織田信長の命令により細川幽斎（藤孝）の子 忠興に嫁ぎます。

細川ガラシャ隠棲地に建つ記念碑

天正 10 年（1582） 6 月、「本能寺の変」の際、光秀は忠興を味方になるように誘いますが、忠興はこれを聞かず玉子を幽閉し、自分は羽柴秀吉軍として出陣し、光秀と山崎で戦うこととなりました。

玉子の実の父 光秀の死後、家臣は玉子に自害をすすめますが、「私は忠興の妻、主人の命令を聞かずして事を決することは夫にそむくことです。」とこれを聞き入れず、天正 10 年から 12 年（1582 ～ 1584）まで幽閉され、 2 年の月日を弥栄町味土野の地で過ごすこととなったと伝えています。

隠棲地（女城跡）は、別名御殿屋敷ともいわれ、谷を挟んだ向かいの丘陵は「男城跡」で、玉子に付き従った家来達の居城の跡と言われています。

秀吉はこれを憐み玉子を許し、忠興は再び妻として玉子を迎えることとなりました。その後、キリスト教に入信し、「ガラシャ」の洗礼名を受けました。

しかし、平穏な日々も束の間、慶長 5 年（1600）、関ヶ原の戦いの直前に、徳川家康に従い会津の上杉征伐についた夫 忠興の留守に、大坂の細川邸にいた玉子は石田三成の軍勢に囲まれ、人質として大阪城へ入城を迫られます。しかし、「私が人質として入城すれば、夫 忠興の足手まといとなります。」と自ら邸宅に火を放ち、壮烈な最期をとげました。享年 38 才夏のことです。次の辞世の句は有名です。

散りぬべき　時知りてこそ　世の中の
花も花なれ　人も人なれ

戦国の世に生き、夫 忠興のため、自ら死を選んだ玉子の生涯は、戦国の世の悲劇として、現在に語り伝えられています。

また玉子が、味土野で詠んだ歌も伝えられています。

身をかくす　里は吉野の　奥ながら
花なき峰に　呼子鳥啼く

※ 呼子鳥　カッコウのこと。鶯、ホトトギス、春の山鳥との説もある。

細川ガラシャ像

3 松井康之の久美浜支配

松井康之は、天文 19 年（1550）生まれで細川家の家老格の有力な武将です。

松井康之は、松倉城に入り、ふもとの久美浜に城下町を整備しました。また父正之と母

松井康之像（宗雲寺所蔵）

法寿のために宗雲寺を再興し、ここに両親の墓（肥後の墓）を移しました。

松井康之は、細川氏の最有力武将として、豊臣秀吉の伯耆鳥取城の戦や文禄２年（1593）の朝鮮出兵、関ケ原の合戦時には豊後杵築城の戦いにも参加して活躍しています。秀吉は、康之の活躍により大名に取り立てることを申し出ましたが、康之はこれを辞退し、細川氏に仕えることを望みました。

細川幽斎と同様に茶道や文芸にも秀でており、茶道は千利休に学んでいました。

4 京極氏の丹後支配

京極高知像（常立寺所蔵）

細川氏に続いて丹後を治めたのが、京極高知です。京極家は室町幕府の要職を務めた大名として知られています。高知は、入国の翌年、慶長７年 (1602) に所領である丹後全域にわたる検地を実施しました。この検地は日本全国にわたって行われたもので、諸大名の所領の実態が明らかになりました。

それによると、加佐郡が村数 134 ヶ所、小村が 13 ヶ所で石高が 37,383 石７升、与謝郡が村数 52 ヶ所、小村 44 ヶ所で石高が 31,462 石４斗５升、丹波郡（後の中郡）が村数 28 ヶ所、小村９ヶ所で石高 19,217 石７斗７升、竹野郡が村数 37 ヶ所、小村 29 ヶ所で石高 19,565 石３斗６升、熊野郡が村数 41 ヶ所、小村 11 ヶ所で石高 15,546 石３斗６升と記されています。

京極高知の死後、遺言により丹後は３藩に分けられ、高知の３人の子が治めることとなりました。宮津藩を高広、田辺藩を高三、峰山藩を高通が統治しました。

5 京極氏と峰山藩

元和８年（1622）、３藩に分けられた丹後国のうち峰山藩主となったのは京極高通でした。明治４年（1871）に藩が廃止になるまでの 12 代 250 年間、京極氏が治めました。

京極高通像（常立寺所蔵）

峰山藩は石高一万石の小さい藩ではありましたが、３人の藩主が江戸幕府の若年寄（老中につぐ重職）をつとめるなど、譜代大名並の扱いで幕府の重要な職務につきました。また、大阪城の警護の加勢を行う加番も務めました。

また、隣の宮津藩領、久美浜代官所領と比較すると、250 年の間に一度も百姓一揆が起きなかったことは注目されます。これは小さい藩ゆえに管理が行き届いたことと同時に、領民にとって良い政治だったためと考えられています。

京極家の歴代藩主の墓のある常立寺には、初代の父高知、初代高通、２代高供、３代高明、４代高之、５代高長、６代高久、７代高備、７代高備の次男高聡、８代高倍、９代高鎮、10 代高景と藩主の肖像画が 11 代にわたり残されています。

丹後ちりめんを扱う問屋を選定するなど丹後ちりめんの保護策をとり、振興をはかったのも京極家です。４代藩主高之の時代、享保５年（1720）に絹屋佐平治が京都の西陣からちりめん技術を峰山に持ち帰り、初めてちりめんを織り出しました。その後、歴代藩主のもとで発展をとげ、丹後全体に富と活気をもたらしました。

また、４代高之は、博学多才であり、書画・木工・陶芸の作品が伝えられています。７代高備の時代には、四国の讃岐の金毘羅権現を峰山へ分霊し、金刀比羅神社が創建されました。６代高久、７代高備、11 代高富は、江戸幕府の若年寄の重要な役目を務めました。

しかしながら峰山藩に関しての歴史的資料など多くの文化財が、昭和２年３月７日に発生した丹後震災により焼失しました。多くの人命や建物のみならず、貴重な文化財も、この震災により大きな被害を受けました。

コラム　新田開発

江戸時代初期から、各地で新田の開発が行われてきました。京丹後市でも新田開発が行われています。網野の離湖においては、近隣の水田が冠水の被害を受けており、網野島溝川の足立久兵衛と小浜の湖口小左衛門が離湖の水を海に流す約 600 メートルのトンネルの掘削工事を成功させました。これにより、新田として 17 町歩（約 17ha）、冠水から免れた耕地は 15 町歩（約 15ha）にも及んでいます。その他にも多くの新田が開発されました。

6 天領と久美浜代官所

久美浜湾の風景

熊野郡が幕府の直轄領（天領）になったのは、寛文６年（1666）からです。これは熊野郡を領地としていた宮津藩が、藩主京極高国父子の不和と領内農民への悪政を理由に領地を没収されたため、江戸幕府の直轄領となったものです。当時は、但馬の生野代官所の支配下に置かれます。その後、湊宮に「船見番所」が設けられ、享保 20 年（1735）に代官所は久美浜に移されました。現在の久美浜小学校の位置が代官所のあった場所と

なっています。

寛政11年（1799）の「丹後但馬美作国村々新高帳」により久美浜代官所の支配地を調べると、熊野郡41ヶ村、竹野郡40ヶ村、中郡10ヶ村、加佐郡4ヶ村、与謝郡12ヶ村の丹後分が107ヶ村、城崎郡50ヶ村、二方郡19ヶ村、気多郡14ヶ村、養父郡2ヶ村の但馬分85ヶ村、美作の吉野郡35ヶ村で、合計227ヶ村にまで及んでいたことがわかります。また、江戸時代の終わりの久美浜代官所支配地は、美作がなくなり、但馬、丹後で7万石近くになっていました。支配地の村は、東は現在の福知山市大江町、西は兵庫県美方郡新温泉町の範囲にありました。

年貢は米と銀で集められました。米は、旭湊（久美浜町蒲井）などから千石船で江戸、大坂へ送られ、銀は陸路で大坂へ送られていました。

7 丹後ちりめんと絹屋佐平治

森田治郎兵衛の墓

丹後ちりめんは、丹後の基幹産業として発展していきますが、丹後ちりめんの始祖として、絹屋佐平治がよく知られています。享保の時代（1716～1735年）の峰山の人で、次のような話が伝えられています。

丹後は古くから絹織物の産地でした。しかし、京都の西陣で織り出された「お召ちりめん」が好評で、丹後の織物は売れなくなっていました。京都の西陣の布には、表面に「シボ」という小さなボツボツの織模様ができる絹織物で、この「シボ」のある絹織物は、「ちりめん」と呼ばれていました。

この「お召ちりめん」の織物技術は、中国から伝えられた新しい織物技術で、西陣はこの織物技術を習得し、その技術が他国に伝わらないように守っていました。

佐平治は、この「シボ」をどうして織りだすのか、研究して何度も試行錯誤を繰り返しますが、うまくいきませんでした。このため、京都西陣に住み込み、シボを生み出す糸撚り車の技術を学び、改良を加え、享保5年、苦労の末に佐平治は「ちりめん」を織り出すことに成功しました。

でき上がった「ちりめん」は、西陣の「お召ちりめん」よりも厚手で、「シボ」も高い丹後独自の織物で、こうして丹後ちりめんの誕生となりました。

佐平治は、この糸撚り機や織物の技術を教え、丹後ちりめんの技術は次第に広がっていきました。峰山藩もちりめんの振興策をとり、享保15年5代藩主京極高長は、佐平治の功績をたたえ、「お召縮緬ちりめんや」と紺地に白く染めぬいたのれんを佐平治に与えました。

絹屋佐平治は、名前を森田治郎兵衛と改め、丹後地域の地場産業である「丹後ちりめん」の始祖としてたたえられています。なお、峰山町常立寺には、森田治郎兵衛の墓があります。

8 丹後の大飢きん

久美浜小天橋

江戸時代の代表的な飢きんに、享保（1716～36）、天明（1781～89）、天保（1830～44）の飢きんがあります。このうち天明の飢きんは、天明３年（1783）、浅間山の大噴火による火山灰の影響で、日射量が低下したため大凶作となり、日本全国が飢きんに見舞われました。初夏から秋まで数度の大風雨、洪水に見舞われ、凶作により米価が暴とうしました。

この飢きんでは、丹後でも多数の餓死者が出ました。久美浜の湊宮の五軒家（小西の三家、木下家、五宝家）と呼ばれる廻船問屋では、蔵から米を出して飢えた人々にお粥をふるまいました。そのうわさを聞いた人々が遠方から杖をついて、最期の力をふりしぼり湊宮に向かったと伝えられています。しかし、その途中で力尽きて亡くなった人が多くいたと伝えています。

そこで、20年後の文化６年（1809）に、3人の医師が餓死者の骨を集めて供養しました。この時の石碑が湊宮に残されており、石碑には「群霊曝骨墓」と記されています。

コラム　文政一揆

文政５年（1822）に宮津藩で30,000人もの百姓が一揆を起こしました。当時の宮津藩は財政が窮乏していました。そこで、藩主 本荘宗発は、宮津藩の財政再建のために「万人講」という名目で、８才以上70才までの人に人頭税をかけました。当時、宮津藩では年貢も六公四民（収穫高の６割は年貢として宮津藩に納め、残りの４割が農民の取り分というもの）の重い年貢がかけられており、さらに１人１日２文の人頭税をかけるというものでした。そして、その実情は大庄屋、庄屋そして藩の役人達が申し合わせて、集めた金の一部を自分たちの利益としていたものでした。そのことを知った藩内の百姓達は、密かに一揆の準備を進めました。

文政５年12月13日に農民達は武器を持ち、各村の大庄屋、庄屋の家を打ち壊し、文殊村に集結し、宮津城下に押し寄せました。大一揆の人々に驚いた宮津藩の役人は、万人講はやめる、一揆でとらえた７人の者は釈放する、米千俵を与えるなどの約束をしましたが、年が明けると百姓一揆に参加した百名近い領民を検挙して取り調べ、最初に検挙した吉田新兵衛、為治郎ら11人に真相を追及し、吉田新兵衛と為治郎は処刑されました。新兵衛は辞世の歌を残しています。

桜咲く　桜の山の　桜花
散る桜あれば　咲く桜あり

大正14年（1925）には、一揆の犠牲者を顕彰するため、宮津老翁坂に３メートル余りの「義士義民追頌碑」の石碑が建てられています。

9 廻船業

昭和初期　間人漁港

鉄道が開通するまでは、大量の貨物の輸送には船が最も有効な手段でした。江戸時代、日本海の沿岸には北前船の航路が開かれ、北前船によって各地の産物が取引されていました。

丹後においても、間人、浅茂川、湊宮はその北前船の寄港地として発展しました。

湊宮の「五軒家」というのは、廻船業の他に両替商や酒造業を行っていた本座屋、新シ屋、下屋、木下、五宝の五軒の豪商のことです。五軒家が最も栄えていたのは、天正期（1573～1592年）から江戸時代前期だと考えられています。延享3年（1746）の湊宮村の明細帳には、850石積から420石積の船19艘があったことが記されています。しかし、幕末期になると船は小さくなり、弘化2年（1845）の記録によると、湊宮村の船は16艘で、最も大きなものが150石積と記されています。

また、間人も北前船の寄港地として活気を呈し、船荷問屋として但馬屋と加賀屋と因幡屋がありました。加賀屋には宝暦年代（1751～1764）から明治にわたる客船帳が残されています。この記録には、北海道から九州までの船名が記されています。

久美浜湾

弘化2年（1845）の記録によると、間人村には18艘の船があり、300石積 6人乗りのものが最も大きく、その他に中浜村に8艘、竹野村に3艘の船が記録されています。

丹後は古代から福田川河口、竹野川河口、久美浜湾と天然の良港を利用し、中国、朝鮮半島そして日本各地との交易の拠点として発展してきた歴史があり、丹後の人々は日本海を行き来する航海の技術を有していました。

しかしながら、晩秋から冬の日本海は荒天つづきで、11月から2月にかけての冬期間は北前船の航海はしませんでした。現在のように動力船を持たない当時の人々にとって、廻船業は、極めて危険な命がけの商売でした。

コラム　廻船問屋の番頭さん

谷源蔵氏の書いた『間人民族の研究』に北前船との取引を行った廻船問屋について記されています。

「遥か沖より白帆が間人港目がけて馳せて来ると東西の両問屋の番頭さん（注:平素入港船に注意し、送り迎えの役目)、それと認めるや各自まず長筒の遠眼鏡で一番に帆の反数と両テンビ又は中テンビの帆印や舳の上がり下がりの船型により何丸或いは何処船かを判断する。兎に角両問屋の番頭さんは小さな手船をおろし一生懸命で港口まで出迎える。（注：その船が、かつて両家とも取引のない初めての船とすると、早く本船を迎えた問屋に取引関係を始めるとの規定となっていた）さればこそ互いに競争して先着をあせった。それを見物して勝負を競う閑な人もあり、あたかも今日のオリンピックを観るの観もあったようだ。」江戸時代から明治にかけての間人の様子が目に浮かぶようです。

10 伊能忠敬の丹後の測量

江戸時代後期に日本全国を測量して日本地図を作成した伊能忠敬（1745 ～ 1818）は、文化３年(1806)に丹後地方の測量を行っています。『伊能忠敬日記』によれば､8 月 29 日、測量隊は三手に分かれ、一番は湊村から浜詰村、二番は浜詰村から浅茂川村・小浜村境まで、三番は浅茂川湖を測量し、この日は網野の大庄屋の家に宿泊。翌 30 日は、一番は小浜から間人まで、二番は小浜から掛津村に至る海辺と離湖、三番は三津村と間人村の境周辺から間人村までを測量しました。

また、文化 11 年（1814）にも丹後を訪れ、主に内陸部の測量を行っています。この時は久美浜から野中村・鱒留村を通って峰山に入り、岩滝・宮津に至るルートをとっています。これらの全国を測量した成果をもとに、伊能忠敬の死後、文政４年（1821）に『大日本沿海輿地全図』が完成しました。

11 近世の文化財

売布神社本殿

神谷神社本殿

日吉神社本殿

多久神社本殿

桃山時代、江戸時代の文化財について紹介します。この時代の神社では売布神社本殿（網野町木津）の建物が最も古く、寛文9年（1669）に建造されたもので、一間社流造の装飾的要素の少ない古風な建物です。

一方、江戸時代末期の日吉神社本殿（網野町浅茂川）も組物、彫物は見どころとなっています。日吉神社の彫物師は当時の丹後の神社彫刻を飾った中井権次正貞で、その他、三嶋田神社（久美浜町金谷）の彫物も手がけています。多久神社本殿（峰山町丹波）も細部を華麗な彫刻で飾っており、神谷神社本殿（久美浜町新町）も各種の精巧な彫り物が施された建物です。

また、慶徳院（峰山町五箇）には、長沢芦洲（1767 ～ 1847）が描いた障壁画が伝えられています。京都画壇で父芦雪とともに活躍した画家で、水墨画を基調にして淡彩をまじえた虎や山水人物画が描かれています。

慶徳院　方丈障壁画　長沢芦洲筆

第９章　近現代の丹後

１ 明治維新の丹後

① 大政奉還

本庄宗秀像

京極高富像

幕末になるとロシアの船が蝦夷地（えぞち）やエトロフ島などに上陸するようになり、また日本海沿岸の諸藩は、ロシア船などの外国船に対して神経をつかうようになりました。

宮津藩、田辺藩などは海防警備のための砲台（ほうだい）を設置しました。

慶応（けいおう）２年（1866）、幕府は第２次長州征討を行い、長州軍と戦争をはじめることとなります。当時、老中であった宮津藩主 本庄宗秀（ほんじょうむねひで）は先鋒副総督（せんぽうふくそうとく）をつとめ、若年寄である峰山藩主 京極高富（きょうごくたかとみ）は四国征長諸軍の取締りにあたっていました。

しかし、長州征討は失敗し、幕府の権威を失墜（しっつい）させました。慶応３年（1867）10 月 14 日、第 15 代将軍徳川慶喜（とくがわよしのぶ）は政権の返上を朝廷に申し出て、朝廷はこれを受理しました。「大政奉還」と呼ばれているものです。さらに、12 月９日に幕府を倒そうとしている人達が、幕府を廃止し、天皇中心の新政治を組織することを宣言したのが、「王政復古の大号令」と呼ばれるものです。

② 山陰道鎮撫総督　西園寺公望

当時、丹波･丹後の譜代大名である丹波亀山（亀岡）、篠山、福知山、丹後田辺（舞鶴）、宮津などの藩主たちは新政府の方針にすんなりと従うかはっきりしませんでした。

そこで、慶応４年（1868）１月３日、新政府は山陰道に鎮撫総督（ちんぶそうとく）として満 18 歳の公卿（くぎょう）　西園寺公望（さいおんじきんもち）を任命し、西園寺は１月５日に京都を出て、およそ 20 日間でこれらの藩を服属させて五箇、久美浜をへて１月 27 日に豊岡に到達しています。

西園寺公望

③ 廃藩置県

明治新政府になり、様々な制度改正と改革が実施されました。

明治４年（1871）７月、中央集権体制を確立するために廃藩置県が行われました。全国が３府 302 県となり、丹後は宮津・舞鶴・峰山・久美浜の４県となりました。

久美浜県の範囲は、丹後・丹波・但馬・播磨・美作の５ヶ国にまたがる広域なものでした。さらに、明治４年 11 月には全国３府７２県に統合され、丹後５郡は但馬全８郡、丹波天田・氷上・多紀の３郡とともに豊岡県となりました。その後、明治９年（1876）８月に豊岡県が廃止され、丹後は京都府に入り現在まで続いています。

この頃、戸籍法改正、学制発布、徴兵令、地租改正条例の制定など、多くの制度改正が行われました。

２ 自由民権運動と天橋義塾

小室信介像

沢辺正修像

天橋義塾は明治８年（1875）に成立した私塾です。自由民権運動の活動を行い、明治憲法制定以前の私擬憲法作成などを行っています。中心的な人物として、小室信介、沢辺正修などがよく知られています。

小室信介は、嘉永５年（1852）に宮津で生まれ、教師であり、天橋義塾のリーダーで、明治 12 年以降は大阪日報や朝日新聞に入社したジャーナリストでもありました。明治 14 年に立憲政党の設立にも参加しています。明治 18 年（1885）、病気のために 33 歳の若さで亡くなりました。

沢辺正修は、安政３年（1856）に宮津で生まれ、天橋義塾の社長となり自由民権運動の中心的な役割を果たしました。明治 19 年（1857）、肺結核のために 31 歳で同じく若くして亡くなりました。

天橋義塾は、東京の慶応義塾、西の立志社とともに三大義塾と称されましたが、自由民権運動の衰退とともに明治 17 年（1884）に解散しました。

このように、明治時代初期から中期にかけて、天橋義塾には教育や自由民権運動に情熱をそそいだ若者たちが多数いました。

3 豪商稲葉本家と十二代稲葉市郎右衛門

豪商稲葉本家

稲葉家（稲葉本家）は、土地集積により富をたくわえ、7代・8代から付近諸藩の金融を一手に引き受ける豪商となりました。

宝暦6年（1756）、6代喜兵衛の時に久美浜代官より掛屋を命じられています。掛屋とは、村々から代官所へ上納された年貢銀を預かった商人のことです。離座敷の吟松舎には、大名や文化人が立ち寄りました。

稲葉市郎右衛門英裕

現在の稲葉家住宅は、12代市郎右衛門（英裕）が明治18年（1885）から5ヶ年かけて建てたもので、主屋、長屋門、南宝蔵、北宝蔵などからなります。彼は衆議院議員等を歴任したほか、株式会社久美浜銀行を設立しました。明治14年（1881）時点では、京都府で最大の地主であったことがわかっています。

12代稲葉市郎右衛門は、天橋義塾とのかかわりも強く、明治13年に国会開設の懇願書を提出するなどの活動をしており、稲葉家には天橋義塾の沢辺正修が執筆した私擬憲法草案である『大日本国憲法』が残されていました。この他にも当時の活動を記した多くの資料が残されています。

コラム　庶民生活の変化

走る蒸気機関車

明治以後、文明開化により生活の様式が大きく変わってきました。

マッチ：1830年頃ヨーロッパで発明され、明治の開国と共に日本へ入ってきました。それまでは火打石と火打ガネで火を付けていました。

電話機：1876年、アメリカのベルが電話機の実用化に成功、明治41年（1908）に峰山・網野に電話が開通しました。ちなみに、東京と県庁所在地間にダイヤル即時通話化が完了したのは、昭和40年（1965）のことです。

電灯が灯った時期：明治45年（1912）に峰山で電灯が灯りました。網野は大正4年（1915）。それまではランプやロウソクを使っていました。

鉄道の開通：大正14年（1925）、峰山駅まで開通。昭和元年（1926）、網野駅まで開通。昭和6年（1931）、木津駅まで開通。昭和7年（1932）、宮津線が全線開通しました。

4 丹後震災と震災復興

焼けた自動車

丹後震災（北丹後地震）は、昭和２年（1927）３月７日午後６時 27 分に発生したマグニチュード 7.3 の地震です。

この地震により、死者 2,925 人、全壊家屋 12,584 棟、全焼家屋 6,459 棟に及ぶ大きな被害を受けました。最も被害の大きかったのは峰山町で、当時の市街地の 90％以上が焼失しました。丹後震災は、地震断層近辺の強い地面の揺れによる建物倒壊の被害とともに、夕食時の火を使う時間帯であったことから、火災による被害が大きかったのが特徴です。

この地震を引き起こした地震断層は大きく分けて２つに分類されます。１つは郷村断層帯で、網野町郷を中心にして北北西から南南東方向に約 18km の長さに延びる断層です。もう１つの山田断層は、与謝野町山田を中心として東北東から西南西方向に約７km の長さに延びる断層です。

金刀比羅神社境内の避難者

郷村断層の震源地付近では、垂直方向に西側が約 60cm 上昇し、水平方向に北側が約 280cm ずれており、その断層のずれが地表面に現れていました。この断層は３ケ所で天然記念物として保存されています。

丹後震災記念館

この地震後、昭和４年（1929）には「丹後震災記念館」が峰山町室（むろ）の地に建設されました。震災により亡くなられた人の慰霊祭（いれいさい）を行い、震災の教訓を後の世に伝えるために建てられた建物です。建物は、昭和初期には珍しい耐震性の高い鉄筋コンクリート造の洋風建築となっています。

5 第２次世界大戦

昭和 12 年（1937）に日中戦争が起こり、国民もいやおうなく戦争に巻き込まれていくことになりました。徴兵制により、多くの人が軍隊に召集されました。

兵士の出征

① 召集令状

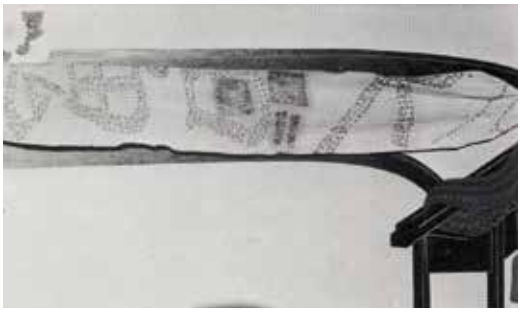
役場の兵事係が「御用」と書いた提灯（ちょうちん）を持ち、召集令状（しょうしゅうれいじょう）（赤紙）と「あかだすき」をもってきました。この令状がくると、どんなことがあっても示された場所にきちっと到着しなければなりませんでした。

② 兵隊送り

出征兵士を送る

戦争が激しくなると毎日のように出征軍人を「勝ってくるぞと勇ましく…」と軍歌を歌いながら小学生も町の人も日の丸の小旗を振り「留守はしっかり守ります。何も心配せず元気で国のために戦って下さい」と送り出しました。

※召集令状がくると、その隣組の人、友だちは出征軍人の武運長久を祈るため、神社にお参りし「お守り」 をいただいたり女の人は「千人針」の腹巻きを作って贈りました（千人針…千人の力によって弾が当たらないことを願った）


千人針

③ 家族の生活

▽ 留守をあずかるお母さん

戦地のお父さんなどが家のことを心配しないように、留守をしっかり守るために今まで、お父さんがしていた仕事を全部１人で行いました。こんな苦労や、又戦死の知らせを受け大黒柱を亡くされたお母さんは国のためとはいいながら、これから先、どうして小さな子供を立派に育て家を守りぬこうと、悲しみと決意は口や字で表すことはできなかった事でしょう。

▽ 戦地の苦労を思うお母さん

戦地のお父さん、息子が元気で国のために尽くし無事凱旋（がいせん）してくれるようにと、朝、暗いうちに氏神（うじがみ）様に雨が降っても一日も欠かさず参拝（さんぱい）しました。中には足が切れるような日に裸足（はだし）参りをしたお母さんもあります。

食事になると「かげぜん」といって、戦地のお父さんなどがお腹が減らないようにと、その人が使っていたお膳に御飯や、おかずを盛ってお祈りしました。

④ 学徒動員と勤労奉仕

昭和 19 年（1944）ごろから米軍機が本土爆撃にやって来ました。東京や大阪などの大都市はもとより、各地の都市も攻撃され多くの小学生は、空襲を避けて農村へ疎開しました。男子は 20 才以上、45 才までの人は兵隊に行くか、軍需工場で飛行機、軍艦、大砲等を造る生活で、中学生（今の高校生）や大学生も学徒動員といって、学校へ行く代わりに毎日工場へ行って工員さんと同じように一生懸命働きました。女学校の生徒も軍需工場や縫工所へ動員され、兵隊さんの着る衣服や帽子などを縫いました。敵の弾が衣服を通さないようにと真心こめて祈りながら作業をやりました。

小学生も勤労奉仕といって出征家族の家へ鍬、鎌を持って農作業を手伝いました。

この頃、長びく戦争に日本はだんだん戦争に必要な物質が無くなっていきます。お寺の釣鐘や鉄やシンチュウでできている家具類、織機など、また金銀の家宝等、どの家でも隠さずお国のためにと供出し、軍艦や鉄砲の弾など軍需兵器に変わっていきました。

日本全国民はこのような社会で、必勝を信じて軍事工場に、食糧増産に一生懸命働いたのですが、極度の食糧不足になり百姓は米作りをしていながら、作った米は全部供出し配給米（大人一日三合程度）を食べ、不足分は海藻、きび、豆かす、草木の葉等、食べられるものはすべて食べ、雑炊をすすって重労働に従事しました。すべての物資は（衣服、靴、日用品など）商店の店先から姿を消してしまいましたが、米をだせば何でも入手でき、いかに食べ物の価値が高かったかがわかります。中にはお嫁にくる時に持ってきた一番上等の着物や帯も、米三・四升ぐらいで交換された時代でした。

しかし、このような全国民の努力も駄目になり、ついに昭和 20 年（1945）8 月 15 日にポツダム宣言を受け入れて日本は戦争に負けました。

第 2 次世界大戦での日本軍の死者は 130 万人以上ともいわれ、京丹後市においてもこの戦争を通じて、3,000 人以上の尊い命が失われています。

⑤ 戦争の記憶

当時の戦争の記憶、思い出をつづった文章を紹介します。（『戦争中のくらし　たいざの女』『平和へのねがい』の文章より抜粋）

○ あの苦しい思いは永久に忘れません。二度と戦争は繰り返したくありません。私の弟二人も戦死をしました。

○ それを補うのに季節の野菜は言うに及ばず、海草類ではアラメ、モマ等およそ食べられるものは細かくみじんに切って米に混ぜ、量をふやして食しました。

英霊の帰還

○私は年老いたお母さんの所に悲報の来た事を聞き、おそるおそる戸口までお見舞いに行きましたが、あまりのお母様の悲しむ有様を目の前に見て立ちすくみました。私の脳裡からあの泣き声が消え去りませんでした。

○米・塩・醤油・味噌・衣料等の生活必需品、赤ちゃんには命の綱のミルク・砂糖に至るまで配給でしたので、その割り当てのむづかしい事。とりわけお乳の出ないお母さんたちは子供のためですので必死でした。産婆さんの証明を持ってきて「もう少しミルクを」とせつかれるのですが、一定量より割り当てがないので、私にはどうすることもできず喧嘩になりかねなく、泣き出す場面も二度や三度ではありませんでした。

○つらい仕事の上に一番困ったことは、食べ盛りの年頃なのに、大豆や豆粕の配給食は、何時も少なくてお腹がぺこぺこだったことです。

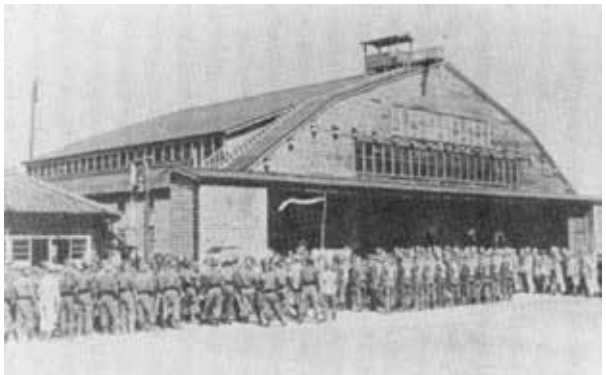
○見送りの生徒たち、手に手に日の丸の小旗を打振り、軍歌を歌い続け村境まで。姿が見えなくなると学校に戻って勉強するのが常であった。

○赤とんぼ（注：練習機）は東山公園のあたりまで行っては又、小学校の方へ引き返す。その中に一段高度が下がってきた。そして、東山公園の松の緑と赤とんぼのオレンジが交錯し、鮮やかな縞になって頭上に迫った時、「堕ちる―。」と頭をかかえた。練習機といっても少年航空兵の夢を国民の信頼を託した赤とんぼのなんと哀れな姿。竹ヒゴのような細い木組。その上には柿のしぶらしきものを塗った布地が張ってあるだけの翼と胴体。

○ジャングルに入る時は百七十名程であったが、それから二か月足らずで、毎日のように戦病死者が出て、百名を割る生存者とは言え、まともに戦えて食糧あさりに出かけられる者は、日によって人は変わっても十名前後であった。殆んど毎日、夜営の近くに穴を掘り、丸木の墓標を作って「南無阿弥陀仏」の弔いをするありさま、「安らかに眠れ。」とも言えないみじめさ、そして、今日は君、明日は我が身といった弔いの連続。

○激戦の寸暇に手垢でよごれた最愛の妻子の写真をじっと見詰めていた先輩のみなさん。内地からは見ることの出来ない南十字星を仰ぎ、遠く祖国におもいをはせ、肉親の安否を気づかいながら語り明かした、今は無き戦友の諸君。悪夢のような太平洋戦争 ---- 過ぎ去った記録をもう一度ふり返って二度と再び過ちを犯すことのないよう見つめたい。

⑥ 峰山海軍飛行場



峰山海軍航空隊（峰山海軍航空基地格納庫前）

岩国基地に向けて発進

昭和 12 年（1937）、日中戦争が始まり、海軍は、対ソ連戦に備え、舞鶴の軍港を守る戦闘機の基地を建設するために、峰山盆地の河辺から新町にかけて飛行場を建設しました。

滑走路は長さ 1.5km、幅 80m に及ぶもので施設としては、滑走路のほか格納庫、兵舎、通信基地などが建設されました。

峰山海軍航空隊は、昭和 19 年（1944）、第二美保海軍航空隊峰山分遣隊として発足しています。任務は陸上昼間練習機による操縦訓練で、開隊時の兵員数は約 600 名で、昭和 20 年 7 月には 1,500 名にも増員されています。昭和 20 年 7 月には米軍機による爆撃を受け、死傷者を出しています。この旧峰山海軍航空基地格納庫は戦後、地元の機業の工場倉庫として転用されていました。建物は、幅約 30m、奥行約 31m の木造平屋建の大規模なトラスを木造で組んだ珍しい構造となっています。

6 昭和 38 年の豪雪

38 豪雪、家の 2 階まで積もった積雪

昭和 38 年（1963） 1 月、日本海側を襲った豪雪は 100 年に 1 度の大雪といわれました。積雪は、平野部でも 3 m、山間部で 4 m を超え、交通機関に大きな支障が出て、丹後町では宇川線のバス運行も 37 日間途絶えました。12 月に降った雪は、一時止みましたが、それが根雪となりました。その後、 1 月 11 日から 25 日間雪が降り続きました。山間の村落が孤立したりしたため災害救助法が発動され、陸上自衛隊が救援に派遣されてきました。

この雪害により、山間地帯の離村現象が進みました。丹後町三山、小脇、竹久僧、神主、大石、力石、一段、また網野町尾坂、日和田、久美浜町三内などは廃村となり、山間地の過疎化が進みました。

コラム　雪上船ソリ

物資を輸送する船のソリ

38 豪雪では、降り続く雪で交通は全面ストップとなり、食料品や生活用品も店先から日毎に消えていきました。そこで、間人ではテンマ船をソリとして活用し物資を輸送する方法が考え出されました。2 月 5 日早朝にちりめん 1,300 反を積んで雪道を峰山に向けて出航し、帰りは生野菜や粉ミルクを積んで同夜 8 時過ぎに間人にたどり着いて急場をしのぎました。

7 町村の合併

現在の京丹後市は、平成 16 年 4 月 1 日に丹後 6 町の峰山町、大宮町、網野町、丹後町、弥栄町、久美浜町が合併して誕生しました。

合併は、昭和 40 年（1965）に施行された「市町村の合併の特例に関する法律」によるものです。特に平成 11 年（1999）以降は平成の大合併と呼ばれ、多くの市町村が合併しました。この背景には、国や都道府県が積極的に合併に関わったことや、合併特例債（がっぺいとくれいさい）が創設され、財政支援が行われたことなどが大きな要因となっています。

合併の主な効果は、①専門職員の配置など住民サービスの提供、体制の充実強化 ②少子高齢化への対応　③広域的なまちづくり　④適正な職員の配置や公共施設の統廃合など行財政の効率化などが挙げられています。

それ以前の、昭和 28 年（1953）には町村合併促進法が制定され、昭和 25 年（1950）の網野町の合併、昭和 26 年（1951）大宮町の合併、昭和 30 年（1955）峰山町、丹後町、弥栄町、久美浜町の合併が行われて丹後 6 町の体制となりました。

現在の日本の社会が抱える課題として、少子・高齢化、人口減少があります。

丹後 6 町の、昭和 30 年からの人口の推移を 10 年ごとに見ていきたいと思います。

	昭和 30 年	昭和 40 年	昭和 50 年	昭和 60 年	平成 7 年	平成 17 年	平成 27 年
峰 山 町	15,397	15,096	15,066	14,774	14,026	13,258	12,028
大 宮 町	10,743	10,400	10,642	10,486	10,416	10,757	10,122
網 野 町	18,626	18,854	19,218	18,112	16,696	15,361	12,931
丹 後 町	11,620	10,324	9,345	8,611	7,607	6,545	5,316
弥 栄 町	8,027	7,051	6,701	6,388	6,125	5,705	5,058
久美浜町	17,821	15,303	13,522	13,177	12,338	11,097	9,599
合　　計	82,234	77,028	74,494	71,548	67,208	62,723	55,054

国勢調査による

上記の表からは、人口減少が少ない大宮町に対し、丹後町などでは、人口の減少が著しいことがわかります。

著しい人口減少は、京丹後市だけではなく全国の市町村が抱える課題でもあり、それに対応するためさまざまな取り組みがなされています。

丹後６町長による京丹後市の合併調印式

第 10 章　京丹後市の伝説・伝承

京丹後市には多くの伝説・伝承が伝えられています。これらの伝説、伝承は、京丹後市の歴史と文化を考える上において極めて重要で誇るべき財産の１つです。伝説、伝承には成立年代が不明のものも多くあり、時代の変遷の中で内容が変化したり、物語が付け加えられているものもあります。しかしながら、これらの伝説、伝承は、古代の遺跡が物語るように古代丹後の強大な権力と関連のある内容も含まれており、背後には歴史的に深い意味がこめられていると感じられ、魅力的なものとなっています。

1 丹後国風土記

久美浜湾

奈良時代の和銅６年（713）、元明天皇は、編さんの詔を出して諸国に風土記の編さんを命じています。風土記には地方の歴史や文物、土地の状況、地名の起源、伝えられている伝承などが記されています。

『丹後国風土記』の全文は残ってはおらず、逸文という他の書物に引用されたものとして、三つの物語が残っているだけです。「奈具社」という羽衣天女の物語と、「天橋立」の起源、そして「浦嶋子」として記される浦島伝承の三つです。

特に、浦嶋子（浦島太郎）の物語と、羽衣天女の物語は日本中に広く知られている物語です。浦島伝承は、『日本書紀』や『万葉集』にも記されていますが、特に広く知られるようになるのが、室町時代にできた『御伽草子』以降です。丹後国風土記の「浦嶋子」の項には、最初に伊預部馬養連が記したものだと書かれています。この人はかつて丹後国の国司を務めていた人物です。

① 奈具社

「丹後国風土記に曰はく、丹後の国丹波の郡、郡家の西北の隅の方に比治の里あり。此の里の比治山の頂に井あり。其の名を麻奈井と云ふ。今は既に沼と成れり。此の井に天女　八人降り来て水浴みき。」で始まり、内容のあらましは以下の通りです。

奈具社

比治山の麻（真）奈井という池で水浴する八人の天女の一人が羽衣を隠され、和奈佐という老夫婦の子となります。天女はどんな病をも治すという酒を造り、老夫婦は裕福になります。しばらくして老夫婦は天女に対して、天女が自分たちの子供でなく、しばらくの間、仮に養っていただけなので、家を出るように告げます。それを聞いて天女は天を仰ぎ嘆き悲しみ、歌を詠みます。

天の原　ふりさけみれば　霞立ち
　　家路まどひて　行方知らずも

天女は家を出て、荒塩村、丹波里哭木村、それから最後に船木里奈具村に着き、「わが心なぐしくなりぬ」といって、この村に住み着くこととなりました。物語の最後には、この天女が奈具社に祭られる豊宇賀能売命という女神であるとしています。豊宇賀能売命というのは豊受大神ともいわれ、丹後の多くの神社に祭られている女神です。この神は、古代に丹後から伊勢に遷され、伊勢神宮の外宮に祭られています。

丹後に巨大な古墳を築造し、大陸と交易し、進んだ技術を有していた丹後の首長と大和政権との間には密接な関係があり、これらの伝承は興味深い内容です。

② 天橋立

天橋立

「与謝郡、郡家の東北の隅の方に速石の里があり、その海に長大な崎があります。長さが 1,229 丈あります。広さはある所は 9 丈以下で、ある所は 10 丈以上 20 丈以下の広さがあります。この崎が天の橋立と名づけられ、後の方は久志の浜と名づけられています。国生みをした伊射奈岐の命が天上と下界とを行き通うために梯子を造りました。これを天の橋立といいました。しかし、伊射奈岐の命が眠っている間に倒れて来たものだと伝えています。そこで、久志備の浜といいました。これより東の海を与謝の海と言い、西の海を阿蘇の海といいます。」

天橋立は、古くから多くの文人達が訪れ、すぐれた歌や絵画を残しています。特に、雪舟（1420 ～ 1506）が描いた天橋立図（国宝）は、非常に有名です。

③ 浦嶋子

「浦島太郎」の話は、日本全国に知られている昔話です。その伝説の原典は『丹後国風

島児神社

土記』だと考えられています。この『丹後国風土記』は、和銅６年(713)から霊亀３年(717)の５年間に記されたと想定されていますが、浦島太郎の物語が広まり始めるのは、室町時代から江戸時代の『御伽草子』からです。

『丹後国風土記』の浦嶋子については、伊予部馬養という人が国司として丹後に赴任した際に記したものだと考えられています。

この『丹後国風土記』に記されている浦島の物語は、一般に知られている内容と少し違っています。主人公は「浦嶋子」といいます。その内容を要約すると、以下の通りです。

「与謝郡、日置の里に筒川という村があり、嶋子という、日下部氏の祖先にあたる、容姿の優れた若者が住んでいました。雄略天皇の時代に、嶋子はひとり舟にのり、釣りに出かけます。三日三晩たっても釣れず、ようやく五色の亀がかかります。不思議に思い舟に引き上げて、嶋子は眠ってしまいます。いつのまにか亀は乙女となっていました。嶋子はびっくりして美しい乙女に話しかけますと、『わたしは天上にある仙の家のもので、風と雲に乗ってやってきました。一緒に蓬莱に行きましょう』と乙女は誘います。

二人は海に浮かぶ大きな島に着きました。大きな御殿がそびえ、楼閣が輝いています。たくさんのごちそうが並び、たのしい宴のもてなしを受けました。

二人は夫婦となり、３年の歳月がたち、嶋子は故郷がなつかしくなり、両親のことが気がかりとなり、乙女にそのことを話しました。

乙女は『永遠の思いを誓い合ったのに故郷がなつかしくなり、還ってしまうのですね』と嘆きます。

出発の日、乙女も両親も親戚も悲しみながらも嶋子を見送りました。乙女は玉匣（注：玉手箱）を嶋子に渡しながら言いました。『わたしのことを忘れないでください。ここに戻ってこようとするならば、この玉匣は開けてはだめです。』乙女に別れを告げ、嶋子は船に乗り、目を閉じると筒川の里に着きました。

人も村も変わり見覚えのあるものはありません。村人に尋ねると、『水の江の浦嶋子という人が、三百年前にひとり海に出かけて戻らなかったということを聞いたことがあります』と答えます。嶋子は乙女のことを思い、玉匣を開けてしまいました。すると、かぐわしい蘭のよう

皺　榎

な姿が雲となって立ち上がり、風に流され青空のかなたに消えました。もはや乙女に二度と会えなくなったことを知り、涙を流して歌を詠みます。（後略）」これが大まかな『丹後国風土記』の話の内容で、伊根町筒川の話として伝えられています。

一方、網野町には島児神社、網野神社、六神社など浦嶋子を祀った神社や乙姫を祀る西浦福島神社があり、伊根町とともに浦島伝承が色濃く残されています。竜宮から帰ってきた浦嶋子が玉手箱を開け、老人になったことを怒り悲しみ、自分の顔の皺をとって榎に投げつけたために幹が皺だらけになったという「皺榎」が網野銚子山古墳の近くに現存しています。

コラム　大路に伝わる羽衣天女の伝承

羽衣天女の伝承をつたえる磯砂山

「風土記」の羽衣天女の伝承「奈具社」とは別に、峰山町鱒留の大路には、さんねも（三右衛門）という若い狩人と天女の伝承が伝えられており、七夕祭りの催しが続けられています。

「昔、峰山の比治の里に、さんねも（三右衛門）という若い狩人が住んでおり、ある夏の朝、比治山の頂上近くまで来ると、池で水浴びをする八人の天女がいました。木の枝に羽衣がかけてあり、その一枚を抱えると家へ帰り、大黒柱に穴を開けて隠してしまいました。天女は、天へ帰ることができず困ってしまい、とうとう、さんねもの嫁となりました。その後、三人の娘も生まれました。

天女は、蚕飼いや機織り、米作り、酒造りと何でも上手で、比治の里の人々は、天女から色々と教えてもらいました。天女のおかげで、比治の里はみるみる豊かになり、人々は幸せに暮らせるようになりました。しかし、天女は天が恋しくてたまりません。

ある日、大黒柱に隠されていた羽衣を探し出すと、羽衣を身にまとい、『七日七日に会いましょう』と天に帰ってしまいました。それを見ていた天邪鬼が『七月七日に会う』とさんねもに伝えます。悲しむさんねもの手には、天女からもらったゆうごう（夕顔）の種があり、蒔くと、ゆうごうのつるは天に向かって伸びてゆきました。さんねもは、つるを伝って天まで登っていき、天女たちがいる天上の世界にやってきました。妻の天女が寄ってきて言いました。

『天の川に橋を架けて下さい。けれど、架け終るまで私のことを思い出してはいけません。そうしたら、あなたと一緒に暮らせます。』喜んださんねもは、一生懸命に橋を造りあと少しででき上がり天女と暮らせる、とうれしさの余り約束を忘れて、天女のことを思い出しました。すると、天の川がみるみる内にあふれ出し大洪水となって、さんねもは、橋もろとも下界へ押し流されました。」

その後、比治の里の人々は、天女の娘の一人をお祀りするため、小さな社を建てました。これが乙女神社だと伝えられています。現在でも年に一度七月七日に、さんねもと天女が出会う日に大路では七夕祭りが行われています。

２ 河上摩須郎女と丹波道主王

湯舟坂２号墳

『古事記』によると、丹波道主王は丹波の河上摩須郎女(娘)をめとり、３人の娘（比婆須比売命、真砥野比売命、弟比売命）と朝廷別王を生んだと記されています（『日本書紀』では５人の娘)。その３人の娘 は、垂仁天皇に嫁ぎ、比婆須比売が皇后となったと伝えられています。

この河上摩須という豪族は、久美浜町須田の地を本拠として、このあたり一帯を広く支配していたものと推定されます。そして河上摩須は、自分の孫娘の比婆須比売が皇后となったことを喜んで、兜山（久美浜町甲山）の頂上に伊弉冉尊を祀ったのが熊野神社の発祥だと伝えています。

この須田の地には多くの古墳が密集しており、谷の奥に位置する湯舟坂２号墳は、横穴式石室からなる６世紀後半の古墳で、発掘調査の結果、黄金に輝く双龍環頭大刀や多くの遺物が出土しました。

また、久美浜の地名は、丹波道主王が常に帯刀していた「国見剣」の「国見」からくみとなり久美浜と呼ばれるようになったと伝えています。

湯舟坂２号墳の発掘調査

３ 田道間守の伝承

浜詰 夕日ヶ浦

網野町木津には田道間守の伝承が伝えられています。田道間守は、垂仁天皇の命令により、年を取らず、いつまでも生き続けることができる非時の香菓を探しに、常世の国へと旅立ちます。田道間守が苦労の末、ようやく見つけ出し香菓を持ち帰り着いたのが、網野町木津の浜であり、非時の香菓とは橘のことだと言われています。

田道間守は、垂仁天皇がすでに亡くなっていることを知り、持ち帰った香菓の半分を大后 比婆須比売に捧げ、垂仁天皇の墓前で報告し、遅くなったことをわ

売布神社

びて自ら命を断ったと伝えられています。木津の売布神社は、田道間守が帰国後、神を祭ったことが始まりとされる神社です。

よく似た話に徐福伝説があります。徐福は秦の始皇帝の命令で、不老不死の薬を求めて、東方に向かいます。伊根の新井には、徐福が流れ着き、この地に住み着いて進んだ技術をひろめたとの伝承があり、徐福を祀った新井崎神社があります。

4 豊受大神と伊勢神宮

伊勢神宮は、「お伊勢さん」「お伊勢さま」と呼ばれて親しまれており、皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）の二つの正宮があり、皇大神宮には天皇家の祭神である天照大神が祀られ、豊受大神宮には豊受大神が祀られています。

この豊受大神は、天照大神の食事をつかさどる神であり、天照大神のお告げにより、丹波国（丹後国）から迎えられたと伝えられています。

このことは、神宮関係の資料である『止由気宮儀式帳』（804 年）などに記されています。『止由気宮儀式帳』によると、22 代雄略天皇の時代に、天照大神が天皇の夢に現れ、「自分は高天原よりここに鎮まったけれども、朝夕の大御饌（食事）を安らかにとることができない。そこで、丹波国の比治の眞奈井に坐す、私の大御食津神である等由気大神（豊受大神）を自分のもとに喚びよせて欲しい」と告げます。そこで天皇は驚いて、丹波国から豊受大神を伊勢国にうつしたとしています。

この丹波国の神が遷されることの真意はよくわかっていませんが、その背後に政治的な大きな出来事があったのではないかと考えられています。

5 間人皇后の伝承

丹後町間人には、聖徳太子の母親であり、用明天皇の皇后である間人皇后の伝承が、間人の地名由来として伝えられています。

伝承では、蘇我氏と物部氏が、仏教に対する立場の違いや皇位継承問題等により、対立を深め争乱へと発展した際に、間人皇后が争いを避けるために丹波の大浜の里（間人）へ逃れてきたと伝えられています。

この伝承の内容は、『間人村濫觴記録』や『薬師堂記』に記されていました。『間人村濫觴記録』は江戸時代末期に書かれたもので、間人はもとは大浜の里と呼ばれていたとしています。また間人皇后は、争乱を避けるためにお供の者を連れて、村中の小高い所に滞在したと記されます。

間人薬師堂記

お供の者として、東漢直駒など７人の者の名前が記され、この地で世の乱れを避けたとしています。皇后は騒乱が収まり大和の国・斑鳩の宮へ帰る際に、村の名前を間人村とするよう和歌を残します。

大浜の　あら塩風に　馴し身の
　　またも日嗣の　ひかり見るかな

大浜の　里にむかしを　とどめてし
　　間人村と　世々につたへむ

間人薬師堂記

村人は間人村とするのは、皇后の名前をそのまま呼ぶことで恐れ多いとして、文字はそのまま皇后の名前を用いて、この大浜の里を退座されたので、間人村としたと記されています。また、お供としてやってきた人々の子孫は、この地に留まり繁栄したとも記されます。

『薬師堂記』（龍雲寺所蔵）にも間人皇后に関する内容が記されています。

安政３年（1856）に書かれた文書で、龍雲寺の境内地にあった薬師堂の薬師像にかかる由来が記されているものです。

この『薬師堂記』の文書で伝えられる間人の地名については、間人皇后と金麿親王（麻呂子親王）がこの地で御対座（向かい合ってすわる、対面する意）したために、間人村と名付けられたと伝えています。この対座した場所である「御所坪」（龍雲寺北側）と呼ばれる地名も残っています。その他「あしあらいの池」など間人皇后にゆかりの場所があります。

６ 麻呂子親王の鬼退治と丹後七仏薬師

立　岩

麻呂子親王の鬼退治の伝承は、丹後地域に広く伝えられている伝承で、「清園寺縁起」「等楽寺縁起」「斎明神縁起」などの絵巻が存在しています。

また、この伝承は、鬼退治と併せて七仏薬師の内容を伝えており、丹後の七仏薬師信仰の由緒も含まれています。麻呂子親王の鬼退治の内容について、「斎明神縁起」から紹介すると次のようになります。

聖徳太子の弟の麻呂子親王が、弟の塩干親王、松枝親王とともに推古天皇の命令により、三上ヶ岳にすみ、人々を苦しめている三匹の鬼、鱣古、軽足、土車を薬師如来の力により退治し、丹後に薬師如来の霊場を建てるというものです。

首領である鱣古、軽足の二匹の鬼は殺し、土車は後の世の証として鬼の岩屋へと封じ込めます。

また、土車を封じ込めた岩が立岩であり、退治された鬼の墓と伝えられる「鬼神塚」が残されています。

この麻呂子親王の鬼退治の伝承以外にも、日子坐王や丹波道主王などが、従わない者を征伐する話も伝えられています。

想像をたくましくして、鬼の正体はかつて丹後を広く支配していた丹後の王そのものだと考える人もいます。

円頓寺　薬師如来坐像及び日光・月光両脇侍像

麻呂子親王の鬼退治の伝承は、もう一つの側面を持っています。それは、丹後の薬師信仰にかかわるものであり、麻呂子親王は鬼退治が薬師如来の力で成功したことを感謝して、丹後に７か寺を建立して薬師如来を祀ったと伝えています。

その７か寺として清園寺（福知山市）、多禰寺（舞鶴市）、施薬寺（与謝野町）、成願寺（宮津市）、等楽寺（弥栄町）、願興寺（丹後町）、神宮寺（丹後町）などが知られています。これらの寺院には優れた薬師如来像が伝えられており、指定文化財となっている仏像も多く見られます。それ以外にも、京丹後市の円頓寺（久美浜町）も麻呂子親王に縁の寺院だと伝えられており、薬師如来坐像及び日光・月光両脇侍像三体があります。

コラム　竹野の鬼祭り

斎明神縁起に描かれた鬼

竹野の鬼祭りは、江戸時代頃まで行われていたもので、麻呂子親王に征伐された鬼の霊を鎮める祭りとされます。旧暦の 11 月に行われたもので、江戸時代に丹後の歴史や地誌を記した『丹哥府志』にその祭りの様子が紹介してあります。また、日向国の修験者である野田泉光院という人も、『日本九峰修行日誌』に鬼祭りのことを記しています。この内容を要約すると次のような話です。

「この祭りは、変わった祭りで竹野村の下社家という 36 人が水を浴びて身を清め、祭りの前夜から竹野村のある家に籠る。次の日に宮村に行き、宮司と一緒に牧の谷の鬼神塚のところで呪文をあげる。村の人たちは祭りにあたる人々に姿を見られると三年の内に命が終わると言われ、家の戸に鎖をして一人も戸外に出るものはなし。くわしくはわからないが、宮司はその祭りの夜中に従者と二人で、竹野神社に参り米を洗って飯を炊き、竹野神社や鬼神塚、そして立岩にその飯を供えると、その飯を食う者がいる。」と伝えています。この祭りは村人にとっては怖い祭りであったようです。

7 小野小町と五十河の伝承

花の色は　移りにけりな　いたづらに
　　我が身世にふる　ながめせし間に

小野小町の墓

百人一首に彩られている歌の作者、小野小町は、絶世の美女と謳われ、六歌仙の一人として名高い平安時代の女流歌人です。歌風は情熱的な恋愛感情を表現したものが多く見られます。

大宮町五十河には、この小野小町にまつわる伝承や墓が伝えられています。五十河の妙性寺という寺院には、小町を開基とする縁起が残されています。

それによると、小町が晩年に都から丹後へ旅をします。老の坂を越え福知山まで来たときに、丹後の三重の庄、五十日村の上田甚兵衛に出会い、一緒に五十日村へ行くことになります。天津の駅から普甲峠越えは名前（不幸）のとおり難所なので、加悦谷を通り、三重、五十日に向かいます。上田甚兵衛は、五十日では昔から火事が多く困っているのだと話します。これに対して、小町は五十日の「日」の字は火事の「火」に通じるので、都から多くの河を越えてここに来たことにより、「河」に変えて、「五十河」とするように伝えます。字を変えると火事がおさまり、女性も安産になったと記されています。

日も経ち、旅の疲れも癒えてきたので、小町は天橋立、成相寺、真奈井などにお参りしたいと甚兵衛に別れを告げます。

長尾坂まで見送りますが、小町はここで腹痛を起こしてしまいます。そこで、甚兵衛は連れて帰りましたが、辞世の句を詠んで小町は亡くなります。

九重の　花の都に　住みはせで
　　はかなや我は　三重にかくるる

上田甚兵衛は、石碑を建てて「小野妙性大姉」と刻みました。そして小町を開基とする妙性寺を建立しました。

しばらくして、小町の墓前ですすり泣く人がありましたが、次の日には亡くなっていました。村人が調べると深草四位の少将であり、岡の宮として南の山端に墓をつくったと伝えられています。これが小町伝承の概要です。

妙性寺縁起

8 静御前の伝承

網野町磯は、源義経に関係のある静御前が生まれた地だと伝えられています。

磯は、日本海を臨む崖の上に位置する集落で、古くから豊富な魚介類を生活の糧として、主に漁業を営んできた地域です。

静は、この磯で生まれ、父は磯野善次といい、「磯の衆」と呼ばれた海士の一族と伝えられています。静は幼名を静尾といい、幼くして父を失い、母に連れられて都にのぼります。母から舞を習い、天性の美しい容姿を兼ね備え、都でも指折りの白拍子に成長していきました。白拍子とは平安時代末期（院政期頃）に現れた歌舞で、男装をした女性が今様を歌いながら舞う人のことを言います。

静神社

或る時、後白河天皇は、「雨乞の舞」を奉納祈願するように命じますが、誰が舞っても効果がなく最後に静が舞い続けると、急に雨が降ってきたことから、そのうわさが広まり、美しい容姿とともに一躍有名になりました。これがきっかけになり源義経に見初められることとなります。

その後、義経は源氏の総大将として、「壇の浦」で平家を滅亡させ、義経の名声は高まりました。しかし、兄頼朝との対立が深まり、最後は奥州で頼朝の追及を受けた藤原泰衡に攻められ、自害するという悲劇の結末を迎えることとなります。

磯に伝えられている伝承では、義経が「磯の衆」として航海に長けた磯野惣太のもとを訪れ、兵船として使用できる船を調達し、その船に乗り屋島・壇の浦に出陣したと伝えています。

地元には「御付浜」、「入艘の浜」、「影かくし岩」、「カンテラのみよしま」、「弁当岩」、などの地名が残り、頼朝に追われていた義経が、生まれ故郷の磯に帰っていた静に会いにきたと、伝承は伝えています。

静の死後、村人達は静をしのんで木像をつくり、静の出生地の屋敷跡に祠を建てて祀っていましたが、天明２年（1782）の火災において焼失したとされています。その後、祠は再建されますが、昭和２年（1927）の丹後震災により焼けたため、昭和６年に現在地に建てられました。静御前を祀る静神社は、地元では厚く信仰されています。

静の像

第 11 章　近世・近現代の京丹後市の先人たち

ここでは、京丹後市出身の江戸時代から近現代までのさまざまな分野で功績をのこした人、または著名な人を紹介します。この人たち以外にも多くの先人が活躍し、それぞれの分野で足跡を残しており、紹介するのは、ほんの一部の方です。この人たちに共通しているのは、その時代の中で懸命に生き、時代を読み、絶え間ない努力を積み重ねていることです。以下、その業績について簡単に記します。

① 足立久兵衛、湖口小左衛門

水抜穴のトンネル

足立久兵衛と湖口小左衛門は、江戸時代に「かつみ」（離湖）から最短距離の万畳山の下をくり貫いて湖の水を海に流すトンネル工事（マブ）を実現させました。これにより新たに田が開かれ、また近隣の水田が冠水の被害からまぬがれるようになりました。足立久兵衛は、寛永３年（1626）、網野の島溝川村の出身で、湖口小左衛門は、離湖に近い小浜の湖口に住んでおり、生没年は不明ですが、同時代を生きた人です。

延宝２年（1674）海手側と山手側から工事を開始しましたが、当時は人力での作業であり、海の風浪も激しく、のみと金づちによる手掘り作業は困難を極めました。そして苦労の末に延宝４年、水抜穴の掘削に成功します。高さ約１メートル強、幅約１メートル弱で、延長約 600 メートルのトンネルで、樋越川と呼ばれています。

② 松　助

木島神社の狛猫

松助は、江戸時代末期の石工であり、丹後地域において石仏、宝篋印塔、狛犬などの多くの優れた石造物を残しました。

松助は、安永８年（1779）に鱒留村に生まれ、その後、京都の石材産地である山城国愛宕郡白川村の石屋に丁稚奉公します。この地で寛政 11 年（1799）頃、20 歳頃まで修業し、大阪長堀石浜で、仲間２人と石屋を開業しました。その後、丹後に帰り、多くの石造物を製作します。石工松助が製作した石造物には常立寺（峰山町吉原）、福昌寺（弥栄町黒部）、天長寺（宮津市日ヶ谷）の子安地蔵、木島神社（金刀比羅神社末社）の狛猫、地蔵院（大宮町上常吉）の地蔵菩薩立像などの名品があります。特に松助が製作した子安地蔵は、左手に丸々と肥えた乳児を抱え、その乳児に宝珠を持たせたもので、松助の子安地蔵の特徴となっています。

③ 松本　重太郎

松本重太郎は、渋沢栄一と肩を並べる明治財界の巨頭で、「関東の渋沢、関西の松本」と称せられました。

弘化元年（1844）、父 松岡亀右衛門、母 美代の第３子として間人に生まれました。亀蔵と名づけられ、10 歳の時、間人を出て京都の呉服屋などで 13 年奉公し、23 歳の時、独立して反物商「丹重」を営みました。

その後、大阪紡績会社、日本紡績会社、京都製紙会社、大阪麦酒会社、日本火災保険会社、日本製糖会社、毛斯綸織会社、明治炭坑会社、日本教育生命保険会社、大阪毎日新聞社、山陽・南海などの各鉄道会社、大阪運河会社等の多くの会社の創立に尽力し、これらの社長・重役に就任、また百三十銀行・大阪共立・大阪興行銀行等をおこしました。

④ 飯室　岸蔵

研智会のメンバーと飯室岸蔵（前列右から６人目）

飯室岸蔵は、明治時代に地域の青年活動に情熱を燃やした青年です。

明治５年（1872）３月、京都府熊野郡布袋野村に父九郎左衛門、母ときの長男として生まれました。岸蔵は、大阪の専修学校で学び、家を継ぐために進学を断念して明治 19 年（1886）に帰郷しました。明治 21 年（1888）には、同人誌『目ざまし』を発刊します。彼は徳富蘇峰の「国民之友」など「進歩的平民主義」という思想の影響を受けています。17 歳の年に岸蔵は「川上青年研智会」を結成し、学術の研究・風紀の矯正等を目標に、同人誌『明治嬢』を刊行し、講演会などを行っています。研智会はまず、足元の川上村から変えていこうとし、徳富蘇峰の平民主義の影響から、徴兵制度への批判・言論の自由・女性が職業をもつことの必要性などを説きました。

明治 32 年（1899）、27 歳で川上村長となり、就学児童奨励補助金の制度をつくり、貧しい家の児童に教科書、学習用具を支給していますが、明治 39 年（1906）に結核で村長を辞任し、２年後には妻と死別しました。妻の病が「死病」の結核であったために、周囲は離婚をすすめますが、岸蔵はそれをうけいれず、自身も結核に冒され闘病生活に入ります。同じく病床にある妻と床を並べ、おとろえていく妻を看病します。その妻は明治 41 年（1908）に命尽きます。

おさへても　せきくる涙　とどめあえむ
声立てかねて　我胸に泣く

明治 42 年（1909）、岸蔵は幼いわが子の身を案じながら 37 歳の生涯を終えました。

⑤ 羽田　亨

羽田亨は、昭和初期の東洋史学者で『西域文明概論』『西域文化史』などを著わし、昭和 13 年（1938）、第 11 代京都大学総長となりました。

明治 15 年（1882）、中郡五箇村で父 吉村和、母コマの 4 男として生れました。32 年、京都府立第一中学校をへて、34 年、第三高等学校入学、後に中郡長となる羽田信明の養子となりました。

兄吉村盈の話では、「弟は小学校時代から読書をはじめると、徹夜するほど熱心だった。学校の成績も良かったので、当時の中郡長だった羽田信明の目に留まったのでしょう。一中に入って 3 年の時、是非ということで養子にいきました。」と語っています。

明治 37 年（1904）に東京帝国大学史学科（現在の東京大学文学部）に入学し、卒業後に京都帝国大学大学院に入学しています。大正 11 年（1922）、「唐代のウイグル人に関する研究」により、文学博士の学位を取得し、13 年、京都帝国大学教授となりました。昭和 13 年、第 11 代京都帝国大学総長に就任します。昭和 28 年（1953）、文化勲章を授与され、昭和 29 年（1954）、京都市名誉市民にもなっています。

⑥ 小谷　勝重

小谷勝重は、昭和において法学博士として、また最高裁判所裁判官として、法曹界において業績を残しています。明治 23 年（1890）12 月 24 日、丹後町間人の小谷勝蔵の 2 男として出生しました。

大正 3 年（1914）、法政大学を首席で卒業、大正 5 年弁護士試験に合格、大正 6 年から弁護士業務にたずさわりながら、民法学者 富井政章博士の教えを受けています。昭和 16 年（1941）、『日本取引所法制史論』の一大論文を完成し、法学博士の学位を得ました。昭和 21 年（1946）、大阪弁護士会長に推され名実ともに法曹界の重鎮となっています。昭和 23 年（1948）8 月、日本国憲法の下に発足した最高裁判所の創設と同時にその裁判官に任官され、定年まで実に 13 年有余にわたり在職しました。その間、松川事件をはじめ歴史に残る数々の事件を手がけています。

⑦ 平林　初之輔

平林初之輔は、日本の作家・推理作家・文芸評論家。プロレタリア文学運動の理論家として知られています。

明治 25 年（1892）11 月 8 日、京都府竹野郡深田村字黒部に、父万蔵、母うめの 6 人兄弟の長男として生まれました。明治 43 年（1910）、18 歳で京都府師範学校に入学、上京して早稲田大学文学部英文科に入学し、大正 6 年（1917）、25 歳で卒業後、アテネ・フランセでフランス語を学びました。

大正 7 年（1918）、26 歳で、東京のやまと新聞に入社しました。大正 9 年（1920）、労働争議をきっかけに同新聞を退社し、社会主義・マルクス主義に関心を持ち研究をすすめました。

また、プロレタリア文学を理論化することに力を尽くしました。大正 13 年にルソー『エミール（上下 2 巻）』を翻訳しており、この頃より探偵小説に興味を持ち始めます。「私の要求する探偵小説」を発表し、大正 14 年にルソー『民約論』を翻訳し、『自然主義文学の理論的体系』を刊行しています。昭和 6 年（1931）、フランスに映画研究のため留学中、パリ市内で急死しました。39 歳でした。

⑧ 小牧　源太郎

小牧源太郎は、日本美術史上、シュルレアリスム（超現実主義）の代表的画家です。明治 39 年（1906）、中郡口大野村に生まれました。生家は父の代からはじまるちりめん問屋で、長姉と 5 人の男兄弟の次男として誕生しました。旧制宮津中学校をへて立命館大学で学び、昭和 8 年（1933）27 歳の時に「巴里新興美術展覧会」に感銘を受け、シュルレアリスムの存在を知り、昭和 9 年、28 歳の時に「須田国太郎展」を見て影響を受け、本格的に絵の修行を積みました。西洋スタイルに日本の信仰を取り入れ、宇宙観や生命観を吹き込んだ独創的な画風で一時代を築きました。

第 12 章　京丹後市の民俗芸能　～京丹後市の祭り～

丹後には、多くの民俗芸能が伝えられています。種類も多く、太刀振や笹ばやし、神楽、三番叟などがその代表的なものです。

京丹後市の民俗芸能のうち京都府の指定・登録文化財のものは、峰山町五箇の三番叟、峰山町丹波の芝むくり、大宮町周枳の笹ばやし・三番叟・神楽、丹後町竹野のテンキテンキ、丹後町大山の刀踊、丹後町遠下のちいらい踊、弥栄町黒部の踊子、弥栄町舟木の踊子、弥栄町野中の田楽、久美浜町栃谷・布袋野・甲坂の三番叟があります。野中の田楽は、中世の田楽踊のようすを伝える貴重なものです。

弥栄町黒部や舟木、丹後町竹野には、踊子と呼ばれる芸能が伝承しています。黒部、舟木の踊子は、大太鼓、カンコ、ササラのほか、本祭の日には鬼面をつけた鬼一人が加わり行います。竹野のテンキテンキは、太鼓持ち、太鼓打ちがはやす芸能です。

笹ばやしは、舞鶴市から丹後町まで丹後一円に広く伝えられています。風流小歌踊で、口上を述べ、踊を先導するシンポチ、太鼓打ち、音頭という構成を原則として、楽器は、締太鼓のみでシンポチは笹と団扇の構成となります。

三番叟は、一番叟、二番叟、三番叟の３人が、笛、鼓、太鼓、拍子木に合わせて舞う芸能で、京丹後市ではおよそ 10 地区に伝承されています。舞手は少年の場合と大人の場合があります。

神楽は、伊勢大神楽と呼ばれるもので、大宮町、峰山町、弥栄町を中心に伝わっています。

太刀振は、大きく分けて２種類あります。二人が一組になり切り組みを演じる「組太刀」型と大勢が並んで同じ所作で一斉に演じる「大太刀」型です。組太刀型は舞鶴市域を中心に分布しています。京丹後市は峰山町、大太刀型が大半で、約 20 箇所の地区で伝承されています。

峰山の金刀比羅神社の例祭には、山屋台と芸屋台が引き回されます。山屋台では祭礼囃子が演奏され、松と人形などを飾り、芸屋台は、前面が舞台となり、芝居や舞踊が演じられます。

丹波の芝むくり

周枳の神楽

竹野のテンキテンキ

大山の刀踊

黒部の踊子

舟木の踊子

野中の田楽

布袋野の三番叟

第 13 章　京丹後市の産業について

1 丹後ちりめんの歴史

① 古代の機織道具

日本での織物技術は、弥生時代に稲作などといっしょに普及したと考えられています。その織物関係の資料に紡錘車という土製や石製の道具があり、京丹後市では扇谷遺跡、途中ケ丘遺跡などで発見されています。紡錘車は糸によりをかけて糸を紡ぐ道具です。

また、古墳時代の織物生産の資料として木製の紡錘車やかせなどが峰山町の古殿遺跡から発見されています。この遺跡からは中世の木製の糸枠も出土しています。

② 出土した布と絹織物

九州では弥生時代の絹を出土した遺跡が、発見されていますが、丹後で絹織物が確認されるのは古墳時代になってからです。大田南５号墳の青龍三年銘方格規矩四神鏡やカジヤ古墳の筒形銅器も良質の絹織物にくるまれていました。

このほか、弥生時代の布の付着した遺物が帯城墳墓群や左坂墳墓群で発見されており、古墳時代では大谷古墳の銅鏡にも布が確認されています。

③『絁（あしぎぬ）』

あしぎぬの碑

正倉院の宝物の中に天平 11 年（739）に「丹後国竹野郡鳥取郷□田里」（京丹後市弥栄町）の車部鯨という人が貢納した長さ６丈のあしぎぬ一匹があり、実物資料が保存されています。このことから、当時、丹後では絹織物の生産が行われていたことがわかり、これを記念して弥栄町鳥取には「あしぎぬの碑」が建てられています。

④ 丹後の特産品「丹後精好」

室町時代の南北朝に書かれたとされる『庭訓往来』には、丹後国の特産品として「丹後精好」という絹織物が記されています。この精好とは緻密で精美に織られた絹織物のことで、貴族や武士、僧侶などが身につける、はかまに使われました。

⑤ 丹後ちりめん

近世になり、京都のちりめんの技術を導入して新しいちりめんが発展します。丹後には中世から「丹後精好」（丹後絹）の技術がありましたが、ちりめんは、これとは違う新し

昭和 31 年　ちりめん工場

い織物でした。享保 5 年（1720）峰山町の絹屋佐平治と享保 7 年（1722）加悦町の手米屋小右衛門、志賀之右衛門、山本屋佐兵衛の 3 人が京都のちりめん技術を丹後に伝えたといわれています。

なお、このちりめんの技術は、天正年間（1573 ～ 1592 年）に中国との交易に伴い、堺において中国の明の織工が伝えたといわれています。

江戸時代中期にちりめんが丹後に導入されると、農民の間に広まり、ちりめん機業が広がっていきます。宮津藩では、このちりめんに対して各種の制限を設けるなど規制を加えました。峰山藩ではちりめんを集めて、反別検査制を導入してちりめんを一反ずつ検査して販売は合格品だけに限定するなどの政策をとりました。

⑥ 近代の丹後ちりめん

丹後ちりめん

近代になり、ちりめん機業は好況や不況の時期をくり返し、しだいに規模が大きくなっていきました。明治時代では経済恐慌や金融恐慌など不況の時代がありましたが、日清戦争や日露戦争後は好況期もありました。

戦後の復興の時期、昭和 30 年代から昭和 40 年代にかけて高度経済成長期が続き、ちりめん産業も大きく発展しました。「ガチャマン」と呼ばれ、ガチャンと織れば 1 万円が儲かるといわれた時代であり、昭和 48 年（1973）に生産量はピークを迎えます。

この丹後の伝統産業も、着物ばなれなどで深刻な不況となってきていますが、平成 29 年度に『300 年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊』として関連した文化財群と地域の歴史的魅力が日本遺産に認定されました。

⑦ 養　蚕

かいこ

ちりめんと併せて養蚕も盛んに行われました。京丹後市でも、大正年間を最盛期として昭和 20 年代頃まで農家では盛んに行っていました。カイコは脱皮を繰り返して成長していき、最後に繭をつくります。農家では部屋の両側に十段以上の棚を作ってそこへカゴをさして飼っていました。この養蚕は農家にとって大切な収入源でした。

２ 丹後の漁業

① 古代の漁業

丹後の人々は古代より豊かな海のもとで魚介類を食べて生活してきました。縄文時代の網野町の浜詰遺跡の貝塚からはマグロや鮫などの魚やハマグリ、カキなどの貝類が出土しています。また、舞鶴市の浦入遺跡からは縄文時代前期に使用されていた丸木舟も発見されています。

海に面した遺跡からは網のおもりである土錘や石錘も多く出土しており、船を使用しての漁業も盛んに行われていたと推定されます。

浜詰遺跡の出土遺物

② 各種の漁法

丹後では豊かな海の魚介類を獲るために各種の漁法が行われてきました。

○**定置網漁業**は、一定の場所に網を張っておき、毎年決まった時期に一定の場所へ群れをなしてやってくる魚を網の内側へと追い詰めて魚を捕らえる漁法で、網野町浜詰や三津の定置網があります。特に初冬にかけて獲れる寒ブリが知られています。

浜詰の定置網漁

○**手繰網（モヤ曳き網）**は、網をひくもので、冬の期間にはカレイ、アンコウ、ホウボウまた夏から秋にかけてはブリやコダイ、カマスなどを獲りました。昭和 50 年頃にモヤ引き網漁は行われなくなりました。

○**釣漁業** は、一本の釣糸に 1 つの針でつる一本釣りと延縄という一本の幹縄に多くの枝縄をつけてその先に釣針をつけて釣る漁法です。

磯の水視漁業

○**水視漁業（磯見漁業）**は、箱めがねを船の上からのぞいて、主にサザエ、アワビ、ワカメ、テングサ、モズクなどを漁獲する漁法です。

○**潜水漁法**は、人が海に潜って獲物をとる漁法で丹後町袖志では女性（アマ）がテングサやアワビ、サザエの漁を行っていました。

○**底曳き網漁業** は、船から海底まで下ろした網を曳く漁法で、特に近年 間人ガニとして注目されているズワイガニやカレイ、沖ギスなどを対象にした漁です。

「板子一枚、下は地獄」といわれるように、船で日本海に出て漁をする漁師にとって海は恵みを与えてくれると同時に、「ウラニシ」という急変する気候の丹後では、海が荒れて遭難する危険と隣りあわせです。特に機械化が進む前の漁師の生活は厳しいものでした。現在は、ロランCやGPSなどの機器の向上に伴い、漁船の位置が正確につかめるようになり、また岩礁や漁場の位置もわかるようになりました。以前は、山見という船からみる山の形により、自分の船の位置をつかんでいました。現在は魚群探知機なども開発されて、海の中の魚影も認識できるようになり漁業も変化しています。

間人ガニのせり市

しかしながら、大漁祈願と安全への神仏への祈りは漁業者にとっては大切なものであり、古来から独自の風習などが伝えられてきました。丹後では、めぐまれた自然環境の中でさまざまな漁法が営まれ地域の経済を支えてきました。

3 丹後杜氏

丹後杜氏というのは宇川杜氏とも呼ばれます。丹後町宇川地区は農業中心の地域ですが、山間部では積雪が多く、冬場の出稼ぎとして「百日稼ぎ」ということで酒造りに出かけるようになりました。古くは江戸時代にまでさかのぼると考えられます。大正から昭和の初めには丹後杜氏として、全国にその名をとどろかすほど活躍しました。

造酒屋で働く人々を総称して、「杜氏」と呼びますが、もとは「杜氏」というのは酒造りの技術集団の頭領のことです。酒造りの一切の総責任者であり、酒の味は杜氏で決まるともいわれ、長年の経験が必要とされます。

その下に、頭（杜氏を補佐し、蔵内の指揮及び醪の責任者で蔵人の相談相手）、大師、代司（麹づくりの責任者）、酛廻り（酒母づくりの責任者）、検査受、釜屋（蒸米の造り方の責任者）、船頭（酒しぼりの責任者）など細かく作業が分業されています。

酒造りの人たちの生活は、日中だけ仕事をするのではなく夜中に起きだして仕事をしたり、昼から夜にかけても小刻みに作業が入りますので、昼夜をとわず働かなければならない過酷な仕事でした。

「一日の始まりは、朝１時から２時まで麹づくり、２時から４時まで休み、４時から６時まで蒸し取り・朝飯、６時から８時まで休み、８時から11時半まで仕込みその他、11時半昼飯、午後12時から２時まで雑用、２時から４時半まで仕事・晩飯、６時から８時まで麹の仕事、８時以降は自由時間。３日に１回は夜番があり、毎日が同じ仕事の繰り返しで、眠る時間がないのには驚いた。」（『丹後杜氏誌』より）

4 丹後の機械・金属産業

昭和 30 年頃の機械・金属業

丹後の産物としてはちりめんが代表的なものですが、昭和 48 年（1973）をピークとして生産量は 996 万反から平成 22 年度（2010 年度）では 51 万反に激減しました。

ちりめんに代わって、機械・金属産業が大きく躍進してきました。丹後の機械・金属産業は高度な技術水準を誇っており、これには３つの流れがあるといわれます。１つ目は伝統産業であるちりめんの織機、２つ目は機械計算機の生産、３つ目がこの機械計算機を基礎にして丹後で操業を始めた機械生産です。

機械計算機の生産は、昭和 10 年代の終わりに大阪に本社のある精密機械メーカーが工場を丹後に建設したもので、戦後になって本格的な生産が始まります。

昭和 44 年（1969）には、生産台数が推定で年間約 26,000 台で、国内シェアの約 40 パーセントを占めていました。

この機械計算機がもととなり、その後丹後にいくつかの機械・金属企業が誕生していきます。これらの企業では、ミシンの部品やオートバイ部品、自動車部品の生産から工作機械製品の製造を行っています。また、丹後地域の機械・金属産業を支えた主要な技術は鍛造（たんぞう）の技術です。

このような丹後のものづくりの高い技術は、遠く古代の丹後の技術を思い出させます。鉄の針や石の錐などによる奈具岡遺跡の玉つくり、遠處遺跡の製鉄など古代からの高度な技術力が丹後地域の発展をもたらしてきたのです。

5 京丹後市の農業

ジャンボかぼちゃ

京丹後市では、水田、国営開発農地、砂丘畑（さきゅうばた）、樹園地（じゅえんち）において水稲を中心に野菜、果物（くだもの）など多くの農産物が生産されており京都府下最大規模の農業地域です。

主な農産物は、水稲（すいとう）のほか大豆（だいず）、小豆（あずき）、さつまいも、かぼちゃ、大根（だいこん）、ブロッコリー、みず菜、九条ネギ、メロン、梨、ふどうであり、近年新たにお茶が増加しています。

全体的には零細な兼業農家が多い中で、農地を集積して大型機械で農業を展開する専業

農家や農業生産法人なども増加しています。特に昭和 58 年度から約 20 年間にわたり国営農地開発事業（畑地）により 52 団地、約 500ha が整備され、お茶、果樹、かぶ、大根等の加工野菜を中心とした大規模畑作農業も展開されています。

項　　目	京　都　府	京丹後市	構　成　比
経営耕地面積	19,582ha	3,293ha	16.6％
総農家数	35,622 戸	3,692 戸	10.3％
販売農家数	21,172 戸	2,390 戸	11.2％

経営耕地面積、総農家数は、平成 27 農業センサス

最後に、京丹後市の特徴のある農産物について紹介します。

京丹後梨

①丹後産コシヒカリ

京丹後市では、米づくりに最適な環境に恵まれた地域で、「丹後産コシヒカリ」は、日本穀物検定協会が実施する全国食味ランキングで最高評価「特Ａ」を西日本で最多獲得しています。

②京野菜

味に定評のある黒大豆やビニールハウス導入によるみず菜、九条ネギを中心とした「京野菜」が生産されています。

③果樹類

砂丘地や丘陵地で梨、ぶどう、メロンなどの果樹が栽培されており、特に京丹後梨（ゴールド 20 世紀）は糖度が高くて人気があります。

コラム　経ケ岬灯台

経ケ岬灯台

経ケ岬灯台は、白亜の灯台として明治 31 年（1898）に設置されました。レンズ及び回転機械はフランス製で最高級の 1 等レンズを使用しています。灯火の高さは海抜約 143 mの地点に設置されており、その光は約 50km の海上を照らし航海の安全を守る一級の灯台です。

晴れた日には、遠く白山を望むことができ青い海と空、海岸の織りなす景色は最高です。ただし能登半島までは見えません。映画「新・喜びも悲しみも幾年月」の灯台守の映画の舞台にもなりました。

6 京丹後市の観光

冬の味覚　カニ

京丹後市の観光業については、丹後ちりめん業界が不振になるのに替わり、地域の経済を支える重要な産業となっています。丹後は美しい海岸に象徴される自然環境に恵まれており、美しい環境と併せて夏場の海水浴を目的とした観光が盛んとなり、昭和40年代半ば（1970年代）から海岸に面した地域を中心に民宿が営まれるようになりました。

昭和60年代から平成にかけて、旧町ごとに温泉の掘削が実施されて、設備の整った町営の温泉施設がオープンしました。市民だけでなく観光客を対象とした施設の整備にも力をいれています。

近年は夏の海水浴だけでなく、冬の味覚である松葉ガニ（ズワイガニ）などが注目されています。経ヶ岬周辺の沖合いは、松葉ガニの好漁場が広がっており、漁場に極めて近く獲れたカニが格別新鮮であることから、間人漁港に水揚げされるカニは『間人ガニ』とも呼ばれ、丹後のブランドとして冬場の観光客に注目されています。併せて、日本海でとれるブリ、カレイなどの魚介類や久美浜湾のカキは、丹後の冬の味覚の代表的なものです。

久美浜湾のカキ

丹後を訪れる観光入込客（かんこういりこみきゃく）（日帰り客と宿泊客の合計）は平成10年（1998）が最も多く約223万人を数えます。それ以降、減少傾向となりましたが、京都縦貫自動車道の全線開通と海の京都の取り組み等の効果により平成27年度から増加傾向となり、平成28年度の数字は約219万人となっています。

このように、観光は丹後の美しい自然環境や古い丹後の魅力ある歴史、日本海の海の幸などの味覚とともに丹後の振興にとって重要な産業といえます。

コラム 物価の移り替わり

明治・大正・昭和の時代の身近なものの値段です。現在と比べて見ましょう。

（単位：1 円＝100 銭（せん）、1 銭＝10 厘（りん））

	鉛　筆（1 本）		郵便葉書		新聞代（月）		レコード（1 枚）		公衆電話（1 回）	
明治	20 年	1 厘	16 年	1 銭	12 年	18 銭	43 年	1 円 25 銭	23 年	5 銭
大正	10 年	5 厘	元 年	1 銭 5 厘	4 年	50 銭	6 年	1 円 50 銭	13 年	5 銭
昭和	5 年	1 銭	12 年	2 銭	16 年	1 円 20 銭	15 年	2 円 14 銭	19 年	10 銭
昭和	15 年	10 銭	23 年	2 円	26 年	100 円	23 年	135 円	23 年	1 円
昭和	25 年	10 円	47 年	10 円	46 年	900 円	40 年	330 円	28 年	10 円
昭和	62 年	30 円	62 年	40 円	61 年	2800 円	62 年	700 円	62 年	10 円

	ガソリン（1 ℓ）		理髪料金（大人）		たばこ（ゴールデンバット）		ラーメン（1 杯）		食パン（1 斤）	
明治		―	8 年	10 銭	40 年	5 銭		―	10 年	5 銭
大正	11 年	31 銭	9 年	30 銭	11 年	6 銭		―	7 年	14 銭
昭和	9 年	10 銭	18 年	80 銭	16 年	10 銭	5 年	10 銭	15 年	20 銭
昭和	23 年	14 円	25 年	60 円	24 年	30 円	21 年	20 円	26 年	25 円
昭和	41 年	50 円	40 年	350 円	55 年	50 円	42 年	100 円	45 年	50 円
昭和	61 年	128 円	62 年	2900 円	61 年	90 円	62 年	450 円	62 年	145 円

	白米（10kg）		とんかつ（1 皿）		コロッケ（1 個）		ラムネ（1 本）		たいやき（1 個）	
明治	5 年	3 銭	40 年	12 銭		―	20 年	8 銭	42 年	1 銭
大正	5 年	1 円 20 銭	14 年	20 銭		―	13 年	8 銭	14 年	1 銭 5 厘
昭和	20 年	6 円	16 年	30 銭	5 年	2 銭	6 年	5～6 銭	13 年	5 銭
昭和	25 年	445 円	23 年	100 円	25 年	5 円	23 年	15 円	26 年	5 円
昭和	49 年	2100 円	45 年	350 円	45 年	40 円	49 年	50 円	50 年	60 円
昭和	62 年	3760 円	62 年	950 円	62 年	70 円	62 年	100 円	62 年	100 円

	アンパン（1 個）		まんじゅう（1 個）		牛乳（180mℓ）		豆腐（1 丁）		ビール（1 本）	
明治	38 年	1 銭	25 年	1 銭	12 年	4 銭	41 年	1 銭	10 年	16 銭
大正	6 年	2 銭	12 年	2 銭	7 年	6 銭	11 年	5 銭	6 年	31 銭
昭和	13 年	5 銭	22 年	6 円	13 年	8 銭	13 年	6 銭	12 年	37 銭
昭和	26 年	10 円	31 年	10 円	28 年	15 円	26 年	10 円	22 年	100 円
昭和	47 年	40 円	51 年	50 円	48 年	40 円	48 年	50 円	40 年	120 円
昭和	62 年	90 円	62 年	80 円	62 年	70 円	62 年	110 円	62 年	310 円

「値段史年表　明治・大正・昭和」（週刊朝日編　昭和 63 年）より抜粋

1 引用・参考文献一覧

○『国史大辞典』吉川弘文館、○『特別展 京都の自由民権運動 - 自由と民権を希求したひとびと -』(1991) 京都府立丹後郷土資料館、○辰巳幸司『天橋義塾 - 小室信介と沢辺正修 -』(2004)宮津市歴史資料館、○『日本史大辞典』平凡社、○『川上百年史』(1975) 川上小学校創立百周年記念祭実行委員会、○『丹後町史』(1976) 丹後町史編さん委員会、○『大宮町誌』(1982) 大宮町誌編纂委員会、○『網野町史』(1960) 網野町史編纂委員会、○『網野町誌』網野町誌編さん委員会、○『峰山郷土史上・下』(1963)峰山郷土史編纂委員会、○『久美浜町誌』(1975)久美浜町誌編纂委員会、○『久美浜町史資料編』(2004)久美浜町史編纂委員会、○『弥栄町史』(1970)弥栄町史編さん委員会、○田中尚之『石工松助を語る』(2003)清水印刷株式会社、○『網野町人物誌』(1973)網野町郷土文化保存会、○中嶋利雄・原田久美子編『日本民衆の歴史地域編 10』(1987) 三省堂、○『京都府熊野郡久美浜稲葉家資料調査報告書 (第三分冊)』(2008) 京丹後市教育委員会、○『木津村誌』(1986) 木津村誌編纂委員会、○『ふる里の風土が育んだ先人たち』(1991)峰山町立五箇小学校、○『雙軒松本重太郎翁傳』(1985)松本翁銅像建設會、○『両丹地方史』第 55 号奥丹後地方史研究会、○奥丹後地方史研究第 29 号奥丹後地方史研究会、○京丹後市史資料編『京丹後市の考古資料』(2010)、○『丹後町の歴史』(1984) 丹後町教育研究会社会科研究部会編、○『戦争中のくらし たいざの女』(1979)、○『平和へのねがい 戦時中の体験記録』(1986) 平和への願い戦争体験者記録編集委員会、○『青春の軌跡 峯空海と峯空園』(1995) 峯空会編集委員会、○『丹後杜氏誌』(1995) 丹後町教育委員会、○『京都府の民俗芸能』(2000)京都府教育委員会、○秋季特別展『丹後京極氏と肖像画の世界』(2001)京都府立丹後郷土資料館、○特別展『丹後縮緬』(1989)京都府立丹後郷土資料館

2 掲載写真提供および資料所蔵者一覧

○日本列島の誕生イラスト (1p)【山陰海岸ジオパーク推進協議会提供】○トウテイラン (4p)【鳴き砂文化館提供】○三坂神社墳墓群写真(5p)赤坂今井墳墓写真(5p)平遺跡発掘調査写真、出土土器写真(7p)奈具遺跡玉作り道具写真 (12p) 赤坂今井第 4 埋葬発掘調査写真、頭飾り写真(14p)浅後谷南遺跡出土の浄水施設写真(17p)網野銚子山古墳埴輪(19p)遠處遺跡発掘調査写真(22p)離湖と横枕遺跡写真(28p)シミズ谷城発掘調査写真(32p)【京都府埋蔵文化財調査研究センター提供】○浦入遺跡出土丸木舟(8p)【舞鶴市教育委員会】○奈具岡遺跡水晶写真(9p)鉄製工具写真(12p)扇谷遺跡紡錘車写真 (11p) カジヤ古墳主土遺物写真 (16p)【大阪府立弥生文化博物館提供】○梅林寺銅鐸写真(10p)日吉ケ丘遺跡発掘調査写真(12p)大風呂南 1 号墳発掘調査写真、ガラス釧写真(13p)蛭子山古墳舟形石棺、発掘調査写真(17p)【与謝野町教育委員会提供】○函石浜遺跡出土貨泉・銅鏃(11p)ニゴレ古墳舟形埴輪・甲冑(21p)【京都大学総合博物館蔵】○左坂神社墳墓群ガラス玉(12p)三坂神社鉄製品写真(13p)【橿原考古学研究所附属博物館提供】○池上曽根遺跡復元建物写真(18p)【和泉市教育委員会提供】○神明山古墳出土の埴輪写真(19p) 埴製枕と玉類写真(21p) 丹後国分寺塔の礎石写真(27p)【京都府立丹後郷土資料館】○竹野神社本殿(23p)斎明神縁起(59p)【竹野神社蔵、京都国立博物館提供】○矢田神社本田(25p)【矢田神社】○円頓寺薬師如来像(29p、59p)【円頓寺蔵】○成願寺薬師如来及両脇侍像(29p)【成願寺蔵】○縁城寺千手観音像(29p)宝篋印塔・笈(33p)【縁城寺蔵】○本願寺本本堂 (30p) 阿弥陀如来像・当麻曼荼羅図 (33p) 【本願寺蔵】○大宮売神社石灯籠(33p)【大宮売神社蔵】○細川忠興像(34p)【永青文庫蔵】○松井康之像(36p)【宗雲寺蔵】○間人漁港

写真（40p）大間港写真（41p）兵士の出征・出征兵士を送る・千人針（47p）英霊の帰還（48p）【丹後町今昔写真集より転載】○久美浜湾写真（37p40ｐ52p）立岩写真（58p）浜詰の定置網漁写真（70p）磯の水視漁業写真（70p）屏風岩写真・丹後松島写真（巻末）【板垣太子松写真、久美浜一区まちづくり協議会提供】○本庄宗秀像（43p）天橋立写真（53p）【宮津市教育委員会提供】○岩屋寺五大尊像・十六善神像（33p）【岩屋寺蔵】○細川幽斎像（34p）【臨済宗南禅寺天授庵蔵】○京極高知像・京極高道像（36p）【常立寺蔵】○多久神社（42p）【多久神社蔵】○慶徳院方丈障壁画（42p）【慶徳院蔵】○京極高富像（43p）木島神社の狛猫（62p）金刀比羅神社本殿（巻末）【金刀比羅神社蔵】○西園寺公望（43ｐ）【国立国会図書館提供】○売布神社本殿（42p）【売布神社蔵】○日吉神社本殿（42p）【日吉神社蔵】○神谷神社本殿（42p）【神谷神社蔵】○沢辺正修像（44p）小室信介像（44p）【同志社大学図書館蔵】○峰山海軍航空隊写真・岩国基地に向けて発進写真（49p）【青春の軌跡峯空会と峯空園より転載】○奈具社（52p）【奈具神社蔵】○島児神社本殿（54ｐ）【島児神社蔵】○間人薬師堂記（57p）【龍雲寺蔵】○妙性寺縁起、小野小町の墓（60p）【妙性寺蔵】○静神社・静の像（61p）【静神社蔵】○飯室岸蔵ほか写真（63p）【京丹後市立川上小学校】○羽田亨写真（64p）【京丹後市立五箇小学校提供】○平林初之輔写真（65p）【平林初之輔生誕百年記念誌転載】

3 協力者

本書の作成にあたっては下記の機関、関係者にご教示、ご協力いただきました。記して感謝を申し上げます。（順不同）

京都国立博物館、同志社大学図書館、京都大学総合博物館、京都府立丹後郷土資料館、網野郷土資料館、京都府教育委員会、公益法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、大阪府立弥生文化博物館、舞鶴市教育委員会、梅林寺、宮津市教育委員会、与謝野町教育委員会、和泉市教育委員会、山陰海岸ジオパーク推進協議会、東京大学、竹野神社、籠神社、矢田神社、円頓寺、縁城寺、成願寺、本願寺、稲葉本家、大宮売神社、岩屋寺、常立寺、売布神社、宗雲寺、神谷神社、日吉神社、多久神社、慶徳院、奈具神社、島児神社、成願寺、龍雲寺、妙性寺、静神社、金刀比羅神社、京丹後市立五箇小学校、京丹後市立川上小学校、天授庵、永青文庫、久美浜一区まちづくり協議会、国立国会図書館、水本邦彦、植村善博、福永伸哉、大場修、糸井通浩、上田純一、櫛木謙周、山田洋一、飯塚一幸、小滝篤夫

■編　集

京丹後市中学校社会科副読本作成委員会

委員長	水野　孝典	平成23年6月まで
委員長	三浦　　到	平成23年7月以降
副委員長	能勢　芳幸	
委　員	中澤　祐一	
委　員	土田　　将	
委　員	溝畠　敏樹	
委　員	山下　義信	
委　員	平井　久夫	
委　員	田中　光浩	
委　員	後藤　幸雄	
事務局	京丹後市教育委員会文化財保護課	

京丹後市の歴史　第８版
（京丹後市中学校社会科副読本）

発　　行：令和５年３月31日
京丹後市教育委員会
〒627-2501 京都府京丹後市大宮町口大野 226
TEL 0772−69−0640

編　　集：京丹後市中学校社会科副読本作成委員会

印　　刷：株式会社たつみ印刷